
世界を越える終焉の聖騎士物語

LAST ALLIANCE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を越える終焉の聖騎士物語

【Nコード】

N0724W

【作者名】

LAST ALLIANCE

【あらすじ】

デジタルワールドの守護神だった聖騎士は、自分と対になっている聖騎士と戦い、敗北し、生を終えるはずだった。しかし、何かの力で人間界に落とされ、そこで自分の声を聞ける資質を持つ者と出会った。そして、その者と融合した聖騎士は数々のデジタルワールドを救うべく世界を越える戦いに出陣する。これは、その聖騎士が訪れる世界で起きた出来事を記した物語である。

第1話 終わりと始まりの聖騎士(前書き)

どうも。

お久しぶりです。

デジモンオンの新作ですが、どうぞよろしくお願いします。

第1話 終わりと始まりの聖騎士

NEWデジタルワールドの人工的な進化種の多い「未来世界」のスクルドターミナルにある生物が出現した。

その生物は、巨大な竜のような姿をしたデジモン デクスモンだった。

デクスモンは、デジモンが持つデジコア（電腦核）を持たないため、デジモンに分類されないプログラムの類である。

なので、厳密に言えばデクスモンはデジモンではないのだ。

「これ以上のX抗体による争乱は断固として止めなければならぬ……」

スクルドターミナルに出現したデクスモンをある1体のデジモンが見ていた。

そのデジモンは、機械的な白銀の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が白色のマントを羽織って、右肩には蒼色のアーマーをつけ、右手が蒼色の機械狼 メタルガルモンの頭部を模した籠手をしていて、左肩には内側が黄金で外側が赤色の盾 ブレイブシールド をつけ、左手が黄金の竜人 ウォーグレイモンの頭部を模した籠手をした聖騎士だ。

その聖騎士の名前は、ウォーグレイモンとメタルガルモンが人々の平和を願う思いからジョグレス進化した究極体を越えた合体究極体 超越体であり、最強の称号であるロイヤルナイツに名を連ねていて、ロイヤルナイツ最強と言われている聖騎士型デジモンーオメガモンだった。

「元はと言えば、ドルゴラモンをここまで忌まわしい物に進化させ

てしまったのは、誰よりも私の責任だ……」

オメガモンは苦々しく呟くとデクスモンを見ながら、これまでの出来事を振り返った。

デジタルモンスター、デジモンが生きるデジタルワールドはイグドラシルと呼ばれているホストコンピュータによって管理されている電脳世界である。

ある時デジモンの数が余りにも増えすぎたがために、イグドラシルは『プロジェクト・アーク（方舟計画）』を実行した。

『プロジェクト・アーク（方舟計画）』とは、デジモン削除プログラムであるXプログラムを実行することで全てのデジモンを抹殺して、イグドラシルが造り上げたNEWデジタルワールドにイグドラシルがNEWデジタルワールドの平和の維持に必要なロイヤルナイツやイグドラシルが造った実験対象であるデジモンだけを移送する計画である。

そして、『プロジェクト・アーク（方舟計画）』が実行されて、Xプログラムによって全てのデジモンは抹殺された……はずだった。

しかし、イグドラシルの目論見通りに『プロジェクト・アーク（方舟計画）』は進まなかった。

Xプログラムに感染しながらも生き残ったデジモンたちがいたからである。

彼らは、デジコア（電脳核）にXプログラムを自らに取り込む構造に変化させて、取り込んだXプログラムに対抗する“X抗体”を生み出してデジコア（電脳核）内部に組み込ませるように体を作り替えていたのだ。

しかしデジコア（電脳核）内のX抗体は、Xプログラムに感染し続けると消滅してしまうことから、旧デジタルワールドは死を恐れ、Xプログラムに対抗するX抗体を奪い合うという弱肉強食の世界と

化した。

そのため、生き残ったデジモン達は、弱肉強食の世界と化した旧デジタルワールドを離れて、次々とXプログラムの届かない新世界であるNEWデジタルワールドへ逃れて行った。

そこで、イグドラシルはロイヤルナイツに命令を下した。

“NEWデジタルワールドに逃れてきたX抗体を持つデジモン、異分子たちを抹殺せよ”

ロイヤルナイツの一員であるオメガモンは最初は反対していた。

彼は、イグドラシルによって造られたロイヤルナイツではなく、過去に発生した“デジタルクライシス”の時に、ウイルスバスターズのウオーグレイモンとメタルガルルモンが人々の平和を願う思いによってジヨグレス進化したことで誕生したデジモンだからである。

オメガモンは生きたいというデジモンたちの思いに共感してデジモンたちを抹殺せず、事態に対して静観を決めていた。

しかし、NEWデジタルワールドに逃げ込んでくるたくさんのデジモンたちを見て、このままではまた『プロジェクト・アーク（方舟計画）』が実行された時と同じ状況になってしまうと考えたオメガモンは心を鬼にしてX抗体を持つデジモンたちを抹殺し始めた。

ある時、スクルドターミナルにいたデジモンたちを抹殺していたオメガモンに究極のX進化^{ゼホリューション}を遂げた銀色の鎧を身に纏い、額にはインターフェースを付けた”究極の敵”や”破壊の権化”とも呼ばれている獣竜型デジモンドルゴラモンが戦いを挑んだ。

ドルゴラモンの圧倒的な力の前にオメガモンは圧倒されて、敗北の一手手前にまで追い込まれた。

しかし、オメガモンは自身の絶体絶命の危機にも関わらず、決してドルゴラモンに背を向けなかった。

“例えばグドラシルの言う異分子になっても、私は私の正義を貫いてみせる。”

そう決意したオメガモンは、自らX進化ゼホリューションを行い、オメガモンXとなった。

ドルゴラモンと同じくX進化ゼホリューションを遂げたオメガモンXは形勢逆転に成功して、ドルゴラモンに逆転勝利した。

しかし、オメガモンXとの戦いに敗れて倒れたドルゴラモンの身体を漆黒の暗闇が包み、死のX進化デクスリューションが発動されて、例え肉体が朽ち果てようとも、意志が無くなるうとも、本能で無差別にデジコアを補食し、活動し続ける狂気の仮想生命体 デクスドルゴラモンが出現した。

イグドラシルは、デクスドルゴラモンのデータを”解析不能であまりにも危険で脅威の存在”と判断し、現在の世界 ベルサンディターミナルの外へ緊急転送した。

ところが、イグドラシルがデクスドルゴラモンをベルサンディターミナルの外へ緊急転送した時にデクスドルゴラモンのデータの残りがスクールドターミナルに残ってしまい、その結果、デクスモンが誕生したのだ。

話を最初に戻そう。

オメガモンXは、スクールドターミナルに出現したデクスモンに一人戦いを挑んだ。

先制攻撃を仕掛けてきたのは、デクスモンだった。

デクスモンは自身の体躯以上の太さを持つ巨腕を、オメガモンXに向かって振り下ろしてきた。

それを見たオメガモンXはデクスモンの攻撃を素早く回避しながら、右腕を軽く振ってメタルガルルモンの頭部を模した籠手から巨大な大砲 ガルルキャノンを展開させると、デクスモンに照準を合わせながら、ガルルキャノンから連射砲撃を放った。

「ガルルキャノン!!!」

デクスモンはガルルキャノンの連射砲撃を喰らったが、ダメージを受けた様子がないかのように何事も無く立っていた。

(どうしたことだ!? あれだけの砲撃を喰らえば、普通のデジモン、ましてや上位クラスの究極体でも倒せるはずだ!!!)

オメガモンXは自身の必殺技の1つであるガルルキャノンの砲撃を喰らってもびくともしないデクスモンを見て驚愕するしかなかった。

何故なら、デジモンの必殺技は、その名の通り相手を倒す為の最大の攻撃技である。

それなのに、オメガモンXの必殺技の1つであるガルルキャノンはデクスモンに全くダメージを与えることが出来なかった。

その事実だけでもオメガモンXはデクスモンがただのデジモンではないということに気がついた。

オメガモンXはそう考えるや否や、左腕を掲げるとウオーグレイモンの頭部を模した箆手からデジモン文字で『オールデリート』と刻まれた大剣 グレイソードを射出させると、デクスモンへ向かって突撃した。

デクスモンは自身の両腕をオメガモンXに向かって振り下ろした。

しかし、オメガモンXはX進化したことによって獲得した『Omega-Gain-force』オメガインフォースによって、デクスモンが攻撃してくるタイミングと位置を正確に知り、デクスモンの攻撃を難なく躲した。

『Omega-Gain-force』オメガインフォースとは、X抗体によってオ

メガモンの両腕を成しているウォーグレイモンの勘と判断能力、メタルガルモンの測定と分析能力と双方の戦闘経験が合わさったオメガモンの戦闘センスとポテンシャルが極限に昇華されたことで引き出された能力である。

その能力は、戦闘時に一瞬にして未来を読み、その未来に対応できる方法を与える究極の力である。

「グレイソード!!!」

オメガモンXは、デクスモンの攻撃を躲すとデクスモンの額の近くに高速移動して、グレイソードをデクスモンの額に突き刺した。しかし、グレイソードを突き刺されたはずのデクスモンはまた全くダメージを受けた印象がない。

「それならばこれでどうだ!!!」

しかし、オメガモンXは先程の事実でそのようなことは学習済みだと言わんばかりにニヤリと笑うと、突き刺したグレイソードに自身のエネルギーを流し込んだ。

その証拠に、グレイソードに刻まれている『オールデリート』の文字が輝いている。

「オー……ルデリート!!!」

オメガモンXは、自身の究極奥義「グレイソードに触れた物を“完全消滅”させるオールデリート」を発動させた。

「……チイツ!!!」

しかし、『Omega-Gain-force』オメガインフォースが導き出したそ

の後の未来を見たことで、オメガモンXは悔しそうな声を上げた。

「オールデリートでも駄目だったのか……」

オメガモンXは落胆すると同時に、デクスモンの額からグレイソードを抜いて距離を取る為に全力で後退する。

そこには、無傷のデクスモンが立っていたからだ。

オメガモンXの消滅させる力であるオールデリートと未来を予測する力である、『Omega - Gain - force』オメガインフォースはX進化して今の姿になつてから得られた究極の力であるはずだった。

しかし、それらを持ってたとしてもデクスモンには全く通用しないのが今の戦いで明白になった。

(私では、このデクスモンを削除することが出来ない……)

今の戦いでわかったことをオメガモンXはまとめて、結論を出した。

まず、デクスモンの攻撃は、『Omega - Gain - force』オメガインフォースを得た自分には当たらない。

しかし、その自分の攻撃もデクスモンには通じない。

何故なら、デクスモンは実体を持たない存在だからである。

オールデリートは実体を持たない物を”完全消滅”することは出来ない。

つまり、自分もデクスモンも千日手状態に陥ったということだ。

それがわかったオメガモンXは、全身から力が抜け落ちるような錯覚を覚えた。

しかし、このような事態になつたのは自分の責任という責任感とここで引くわけにはいかないという決意がオメガモンXを支えた。オメガモンXは再度デクスモンに攻撃するべく、構えを取った。

「デクスモン、お前は俺が倒す!!」

その時オメガモンXとは別のあるデジモンが現れて、デクスモンに戦いを挑んだ。

(あれは……孤高の隠士…… アルファモンか!!)

オメガモンXはそのデジモンを見て驚愕の表情をした。

そのデジモンは、漆黒の鎧に身を包み、背中に内側が青色(正確に言えばリバーズブルー)で外側が白色のマントを羽織って、背中には同じ2つの漆黒の長方形の収納機がある聖騎士だ。

その聖騎士の名前は、自身もオメガモンと同じく最強の称号であるロイヤルナイツに名を連ねていながら、神話にしか現れないと謳われているロイヤルナイツの一員であり、“孤高の隠士”や“空白の席の主”とも呼ばれ、同胞たるロイヤルナイツ最大の抑止力であり、その姿を決して現す事はなかったと言う伝説の聖騎士型デジモン―アルファモンだった。

「オウリユウモン…… お前の力を借りるぞ!!」

アルファモンは、自身の右手でデジモン文字を書き連ねた。

デジモン文字は即座に円陣を描き、魔法陣と化した。

「究極戦刃王竜剣…… 召喚!!」

魔法陣から眩い光が漏れ出すと、アルファモンは右手を入れた直後にオウリユウモンが変化した剣 究極戦刃王竜剣を召喚した。

すると、アルファモンの背中にある2つの漆黒の長方形の収納機が

ら黄金に輝く翼が生えた。

アルファモンは右手に究極戦刃王竜剣を握り締めると、左手で究極戦刃王竜剣を召喚した時とは別のデジモン文字を書き連ねた。デジモン文字を書き終えた瞬間、突然、世界が停止した。

「Alpha Gain アルファインフォース Force、発動！！」

『Alpha Gain アルファインフォース Force』とは、相手の過ぎ去った戦闘時間、つまり、記憶を巻き戻す事が出来て、それに加えてあらゆる知覚と認識に介入することが出来る能力である。つまり、今のデクスモンはアルファモンが自分に攻撃をしようとしている事を知覚、または認識する事を『Alpha Gain アルファインフォース Force』によって完全に遮断されている状態だ。

何故なら、デクスモンもオメガモンXも、見る 理解する 行動するの手順の見る 理解するの工程に干渉されて、アルファモンの行動を見る事も悟る事も出来ないからである。

しかも、記憶の巻き戻しによるアルファモンが悠然と姿を現した瞬間からデクスモンとオメガモンXの意識では時間が止まっている状態でもあるのだ。

アルファモンは、究極戦刃王竜剣がデクスモンに届く範囲まで近づくと攻撃を開始した。

まずは、デクスモンを究極戦刃王竜剣で斬る、斬る、とにかかくぶった斬る。

そして、アルファモンは究極戦刃王竜剣で斬りまくったデクスモンの残骸を緑色の閃光 デジタライズ・オブ・ソウルで全て撃ち抜いた。

アルファモンはデクスモンを完全に倒したことを確認すると、再度デジモン文字を書き連ねて、『Alpha Gain アルファインフォース Force

e』を解除した。

(すっ、凄い…… 私が究極奥義を使っても倒せなかった相手もあ
あも簡単に倒すとは……)

それらの動作はオメガモンXからしてみたら、全てが一瞬の出来事だったため、オメガモンXはただただ驚愕するしかなかった。

なぜなら、『Alpha Gain Force』アルファインフォースが発動している間の出来事はアルファモン以外には理解することは出来ず、オメガモンXから見れば一瞬の出来事のように見えるからだ。

例えばアルファモンが何十発、何百発も相手に攻撃したとしても、相手や周囲が認識出来るのは一瞬で終わらされた勝負だけなのである。

もし何日が経過しても、『Alpha Gain Force』アルファインフォースが発動している限りは、アルファモンによって”一瞬”に書き換えられてしまう。

そのため、『Alpha Gain Force』アルファインフォースは最強の能力であり、ロイヤルナイトの抑止力たるアルファモンに最適な力でもあるのだ。

一方的に相手を叩き潰す為だけに存在する最高の能力、それこそが『Alpha Gain Force』アルファインフォースである。

全てのロイヤルナイトの抑止力として君臨するアルファモンが最強たる由縁はこの『Alpha Gain Force』アルファインフォースにあるのだ。つまり、全てがゼロへと書き換えられる干渉能力であり、理解されるのは始まりと終わりの一撃のみである。

自身の影だったデクスモンを倒して、究極戦刃王竜剣を魔法陣の中に戻したアルファモンはそのまま何処かへ飛び去っていった。その姿を見たオメガモンXはある決意を固めた。

デクスモンが倒されてから1週間が経過した。

オメガモンXは、イグドラシルに近い世界の中枢部で誰かを待っていた。

ふとオメガモンXが空を見上げると、その相手であるアルファモンが来た。

「久しぶり…とでも言おうか。・・・やはり現れたか、”孤高の隠士”よ。ご苦労なことだ」

オメガモンXは、旧友に再会したかのようにアルファモンに声を掛けた。

X進化する以前にオメガモンはアルファモンに何度か会って話をしたことがある。

アルファモンとオメガモンは“神の双壁”と謳われるほどの実力者なのだ。

それゆえに、両者とも一度も戦ったことはなかったのだ。

「俺の役目だからな。ロイヤルナイツの抑止力でいることは」

アルファモンはオメガモンXの言葉に答えた。

「それで私の前に立ちふさがるといふ訳だな？」

オメガモンXは、左手のウォーグレイモンの頭部を模した籠手からグレイソードを射出した。

「さあな。それはお前の返答次第で変わるだろうな」

アルファモンはオメガモンXの行動を見ると、即座に右手でデシモン文字を書き連ねた。

書き連ねられたデシモン文字は即座に魔法陣と化した。

「聖剣グレイダルファー……召喚！」

魔法陣から眩い光が輝き、アルファモンが右手を入れた直後に光が収束して一振りの剣の形を成す。

光は、柄も刀身も眩い銀色の光を宿した聖剣 聖剣グレイダルファーの姿と化した。

アルファモンは、右手に自分の愛剣である聖剣グレイダルファーを握り締めながら、オメガモンXと対峙する。

「NEWデジタルワールドのためにデジモンを抹殺する。それが我が使命だ。無論、死ぬ最後まで貫かせてもらおう！」

オメガモンXはグレイソードの剣先をアルファモンに突きつけながら宣言した。

「流石はオメガモンだな。だが、俺はその心を解き放つ！」

「……やってみるがいい！」

オメガモンXは、アルファモンの言葉に応じるようにグレイソードをアルファモンに向かって構え、アルファモンも同じように聖剣グレイダルファーを構えて、お互いに息が詰まるほどの睨み合いを行い始めた瞬間に……

「うおおおおおっ！……！」

「ハアアアアアアアツ！！！！！！」

お互いに超音速のスピードで相手に向かって突進すると、オメガモンXはグレイソードを、アルファモンは聖剣グレイダルファアをぶつけ合い、凄まじい火花を散らしながらグレイソードと聖剣グレイダルファアの応酬を繰り返す。

「ウオオオオオオツ！！グレイソードツ！！」

「クウツ！！聖剣グレイダルファア！！！！！！」

オメガモンXが振り下ろして来たグレイソードを、アルファモンは聖剣グレイダルファアで受け止めると、激しい火花が辺りに散る。

「ウオオオオオオオオオオツ！！」

「ハアアアアアアアアアツ！！！！！！」

オメガモンXとアルファモンの戦いは更に激しさを増し続けて、お互いにそれぞれの武器を相手に向かって振るい続けることで、甲高い金属音が辺りに木霊し続ける。

しかし、徐々にではあるもののオメガモンXのグレイソードを振り抜くスピードが増して行き、アルファモンは防戦一步に追い込まれ始めて行く。

「クソツ！！（俺の攻撃が全て読まれてる！！ X進化の恩恵か…

…）」

「そこだ！！！！」

「うおっ！！！」

オメガモンXの渾身の蹴りを鳩尾に食らったアルファモンは苦痛の声を上げ、後方へと吹き飛ばすが、事前に自分で背後に飛んでいたおかげでダメージは少なく、流れるような動きで回転する事で衝撃を殺すと、そのまま左手をオメガモンXに向けて突き出しデジタルイズ・オブ・ソウルを放った。

「デジタルイズ・オブ・ソウル！！！」

アルファモンのその動きに対して、オメガモンXも瞬時に右手のメタルガルルモンを模した籠手からガルルキャノンを展開すると、デジタルイズ・オブ・ソウルに向かって砲撃を撃ち込んだ。

「ガルルキャノン！！！」

オメガモンXのガルルキャノンとアルファモンのデジタルイズ・オブ・ソウルは激突し合った。

その結果、オメガモンXのガルルキャノンがアルファモンのデジタルイズ・オブ・ソウルを撃ち破ったことで煙が発生して、アルファモンの視界を一時的にだが塞いだ。

「しまった！！！」

煙によって視界を一時的に塞がれたアルファモンは焦りの声を上げた。

何故なら、視界が晴れた時にはオメガモンXの姿がなかったからである。

「ガルルキャノン！！！」

オメガモンXは至近距離でガルルキャノンから拡散する砲撃を放った。

「ガアアアアアアアアアッ！！！！！」

アルファモンはオメガモンXの容赦の無い攻撃の前に何も行う事が出来ずに苦痛の叫びを辺りに響かせながら、後方へと吹き飛んでいった。

「クッ！！！」

しかし、爆散する煙の中で立っているオメガモンXも無傷だったわけではなかった。

拡散する砲撃を放った時の勢いで自分も後方へと弾き飛ばされたからだ。

そのため、全身の至るところに被弾の痕が残り、自分の身を守るための背中に羽織っているマントも所々がボロボロになっている。

オメガモンやアルファモンが背中に羽織っているマントは、防御と飛行を可能にする防御武装である。

もう少し詳しく言えば、ある一定の攻撃を完全に無力化し威力を減衰させて尚且つ飛行を可能にする武装である。

自身が放ったガルルキャノンによってダメージを受けたオメガモンXは、体の状態を素早く確認すると、再度構えを取った。

それと同時にアルファモンも瞬時に立ち上がったが、流石にダメージまで隠せないのか聖剣グレイダルファアを杖がわりにして、立っている状態であった。

だが、アルファモンはそれでも戦う意志を失ってはいないのかオメガ

「クツ!!」

徐々にではあるがオメガモンXの方がアルファモンの攻撃を防御する回数が増えて来ていた。

アルファモンは聖剣グレイダルファーでオメガモンXのグレイソードの斬撃を防ぎながら、究極戦刃王竜剣でオメガモンXに攻撃をしているからである。

「ハアアアアアアアアアアアッ!!!」

「クツ!!ウオオオオオオオオオッ!!!（くっ!! 頭ではどこに来るのかわかっていても体が反応することができない!!）」

オメガモンXとアルファモンは互いに鋭く相手に向かって武器を振るい続けながら、凄まじい応酬を繰り広げ続ける。

しかし、アルファモンの攻撃の速度が上がってくるのと同時に徐々にオメガモンXは後方へと押しやられ始めて行く。

オメガモンXは、『Omega-Gain-force』オメガインフォースでアルファモンの攻撃とその対処法がわかっていてもそれに対処できないという問題に悩まされていた。

「そこだ!!」

「グツ!!」

一瞬の隙を衝かれたオメガモンXはアルファモンの鋭い蹴りによって空中に浮かび上がった。

そしてそのままアルファモンは更なる追撃を加えようと、究極戦刃王竜剣と聖剣グレイダルファーを鋭く光らせながら、衝撃によって

思うように体を動かす事が出来ないオメガモンXの体に突き刺そうとする。

だが、その直前にオメガモンXは至近距離でガルルキャノンから圧縮エネルギー弾をアルファモンに向かって撃ち出す。

「ガルルキャノン!!!」

「グオツ!!!」

流石のアルファモンでも至近距離でガルルキャノンを食らった為に苦痛の声を上げて、ダメージの影響からか動きが止まってしまう。そして、オメガモンXもガルルキャノンを至近距離で撃ち出した衝撃によってダメージを受けてしまうが、逆にその衝撃を利用してアルファモンから距離を取り、そのまま動きが止まってしまっているアルファモンに向かって絶対零度の冷気を纏わせた圧縮エネルギー弾を連射する。

「ガルルキャノン!!!」

「デジタルライズ・オブ・ソウル!!!」

オメガモンXのガルルキャノンの連射に対して、アルファモンは左手に持っている聖剣グレイダルファアを一旦大地に突き刺すと、左手を迫って来ているガルルキャノンに向かって突き出してデジタルライズ・オブ・ソウルを放って相殺する。

（危なかった…… 今の俺は両手が塞がれているから遠距離の攻撃に弱いんだよな…… しかも今のガルルキャノンは冷気を纏っているから聖剣グレイダルファアを使うと、実質使用不可能になるんだよな……）

アルファモンは心の中で冷や汗をかきながら聖剣グレイダルファ
ーを左手で再度握りしめるとオメガモンXとの凄まじい応酬を再開
した。

「もらった！！ ガルルキャノン！！」

凄まじい応酬の中でアルファモンの隙を見つけたオメガモンXは、
アルファモンに向かってガルルキャノンを放とうとする。

「させるか！！」

しかし、ガルルキャノンを撃たせまいと考えたアルファモンは左
手の聖剣グレイダルファーをエネルギーを充填しているガルルキャ
ノンの砲口に入れることで、ガルルキャノンを暴発させた。

「しまった！！」

自身の武器が使い物にならなくなったことにオメガモンXは普段
の戦いでは決して見せることのない焦りを見せた。

直ぐ様オメガモンXはグレイソードで役に立たなくなったガルルキ
ャノンの砲身を切り落とした。

「ウオオオオオオオオツ！！ グレイソード！！」

「グハアツ！！」

反撃とばかりにオメガモンXは『Omega - Gain - for
フォーエース
ce』によって、アルファモンが次に取るであろう攻撃を予測して
それに対処すると、グレイソードに激しい炎を纏わせると、全力で

アルファモンを斬りつけた。

それによって、アルファモンは苦痛の声を上げながら後退した。

「（今だー！！）ダブルトレント！！」

オメガモンXは一旦左手のグレイソードを戻すと、右手に凄まじい冷気を、左手に激しい炎を同時に発生させると、両手を交差させて大地に打ち付けた。

すると炎と冷気が同時にアルファモンに向かって迫り来る。

「グアアアアツ！！」

アルファモンは急いで同時に迫り来る炎と冷気を背中に羽織っているマントで防御しようとしたが出来ずに、ダメージを受けた。

（お互いに力も残されていない……次で勝負だな）

オメガモンXは決死の思いで放ったダブルトレントがアルファモンに届いたことに喜びつつも、激戦でお互いにあと少ししか戦えないことを見抜いた。

オメガモンXは覚悟を決めると共にグレイソードの剣先をアルファモンに向けながら、構えを取った。

（俺もあと少ししか戦えない…… 次の一撃で勝負を終わらせる！！）

オメガモンXの様子を見たアルファモンも次の攻防で戦いが終わると確信し、全神経を集中させながら、両手で究極戦刃王竜剣を握りしめると、次の攻防でオメガモンXとの決着をつける為に力を集中させ始める。

アルファモンと睨み合いを行っていたオメガモンXは頃はよし、と判断するとアルファモンに向かって突進する。

「ハアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

「正面からの真っ向勝負か！受けて立つぞ！！！」

自分に向かって突撃して来るオメガモンXに向かって究極戦刃王竜剣を振り下ろそうとするアルファモンだったが、自身の究極戦刃王竜剣がオメガモンXに向かって振り下ろされる直前に、突如としてオメガモンXが消失した。

「なっ！？」

アルファモンは驚愕の声を上げながら、オメガモンXを探した。すると、オメガモンXはアルファモンの目の前にまで高速移動していたが、アルファモンは慌てる事無く、右手の究極戦刃王竜剣を勢いを完全に殺し切れていないオメガモンXに向かって突き出す。

「究極戦刃王竜剣！！！」

（やっぱりそう来たか！！ かつたな！！）

「何ッ！？」

アルファモンが突き出した究極戦刃王竜剣がオメガモンXの体に当たる直前に、オメガモンXはニヤリと笑うと究極戦刃王竜剣を蹴り飛ばし、究極戦刃王竜剣をアルファモンの手から離すことに成功した。

「これで最後だー！ー！ー！！ グレイソー！ー！ー！！」

オメガモンXはグレイソードに激しい炎を纏わせると、全力でアルファモンに向かって振り下ろした。

「その台詞そっくりそのままお前に返そう！！」

アルファモンは左手で素早くデジモン文字を書くとき、自身の後方にある究極戦刃王竜剣を自身の右手に召喚すると、そのままグレイソードを弾き、オメガモンXの胸に究極戦刃王竜剣を突き刺した。

「グフツ！！」

オメガモンXは全身に走る鋭い激痛に苦痛の声を上げた。

「危なかった…… あの時に思いつかなければ今頃立場が逆転していたよ」

「グハア！！」

地面に倒れているオメガモンXに突き刺さる究極戦刃王竜剣を引き抜いた。

再び全身に走った鋭い痛みにも、オメガモンXの口から再び苦しげな声が漏れる。

「……悪いが命はもらおう」

アルファモンの心中には自分の盟友の命を奪うことに対して躊躇うものがあるのか僅かに俯きながらオメガモンXに言った。

「見事だった。この世界を頼んだぞ、アルファモン」

オメガモンXの呟きを聞いたアルファモンは究極戦刃王竜剣を振り下ろし、”神の双璧”同士の戦いに終止符を打った。
オメガモンXは粒子に変わって、消滅した。

「ああ。任せておけ……」

アルファモンは瞳から涙を流しながら今自分が討った盟友の呟きに答えた。

そんなアルファモンを慰めるように雲の間から光が差し込んだ。

その後、アルファモンは姿を消し、しばらくデジタルワールドに姿を現す事はなかった。

そして、この出来事は後に“創世記戦争”と呼ばれ、数々のデジタルワールドが作られるきっかけとなった。

データの宇宙で消滅したはずのオメガモンXは辺りを見回しながら自身の人生を振り返っていた。

(ここはデータの宇宙か…… いつかは来るものだと思っていたから驚きも何もないが……)

オメガモンXが所属しているロイヤルナイツは、数え切れないほどの戦争に身を置き、数多くのデジモンたちと戦い、彼らを退けてきた。

なので、いつ死んでもおかしくはないといつも考えていたせいかどこかで吹っ切れていたのだろう。

(結局、私の介入でNEWデジタルワールドに更なる混乱に陥ってしまった。私は最後の最後で道を踏み外してしまったな……)

オメガモンXはNEWデジタルワールドで起きた混乱は全て自分の責任であることを自嘲するかのように笑った。

それに合わせてオメガモンXの心に痛みが走った。

(もし私がもう一度オメガモンになれるのであれば、信頼できるテイマーの元でジョグレス進化してなるか、テイマーと融合してオメガモンになりたいな……そして、彼、彼らと共に戦い、今度こそ“終焉の聖騎士”の二つ名が似合う聖騎士になってみせる……)

オメガモンはそう決意しながらそのまま目を閉じようとすると、オメガモンXの真上から突如として光が溢れ、オメガモンXの体を包み始めた。

(……これは一体どういう事だ!?)

突如として自身の体を包んだ光にオメガモンXは内心で驚愕の声を上げた瞬間に、データの宇宙からオメガモンXの姿は突如として消失した。

「……ハッ!? ……ここは……リアルワールド?」

気絶していたオメガモンは突如として目を覚まし、辺りを見回しながら自分の状態を急いで確認すると自分の周りを信じられないと言っ目で見つめる。

オメガモンのいる場所は近くにテニスコートがある公園だった。
オメガモンはどういうわけか現実世界リアルワールドに落ちてしまったのだ。

「変だな…… 私はデータの宇宙にいたはずなのに…… もしかしてデジタルワールドの危機か？ だとしたら、何故私がリアルワールドにいるのだろう？」

疑問ばかりで答えが少なすぎる現状にオメガモンは頭を抱えてしまった。

「まずは行動…… 何！？ 体が動かない！！ どういうことだ！！」

オメガモンはまずは行動だとばかりに歩こうとしたが、体が動かなかったことに驚愕した。

オメガモンは現実世界リアルワールドに落ちた際にUSBメモリのような物ーデジタルメモリになっていたので。

デジタルメモリは「ほつとけない」が口癖の少年が司令官ジェネラルとして仲間たちと共に戦っているデジタルワールドにあるのだが、当然オメガモンには知らないことである。

「仕方が無い。私が動けないのであれば、誰かに拾ってもらうまでだ。誰かに拾ってもらうその時まで力を養うとしよう」

そう考えたオメガモンは自分の声を聞き取れる資質のある者ー適デュー合者ナミストを探し始めることを決めると、一時深い眠りにつくことにした。

再び目覚める時は、自分と共に正義を貫くことの出来る資質を備えている者と共に戦うことを確信しながら、オメガモンは深い眠り

についた。

自身のテイマーとして共に歩む者と戦う夢と、自分と融合して自分と一緒にあって戦う夢を一日おきに見ながら。

第1話 終わりと始まりの聖騎士（後書き）

デジモンクロニクルを元にして書いたので

「あれ？アルファモンとデクスモンって相討ちじゃないの？」という質問しないでください。

クロニクルのラストは、アルファモンとオメガモンXの戦いで終わるので。

（ちなみに結果は不明）

今回登場したデジモン紹介

オメガモンX

世代/究極体 属性/ワクチン種 種族/聖騎士型

必殺技/オールデリート、グレイソード、ガルルキャノン

“ロイヤルナイツ”の一員である聖騎士型デジモン。ウイルスバスターであるウォーグレイモンとメタルガルルモンが融合して誕生した。X進化し、戦闘時に一瞬にして先を読み対応できる究極の力「オメガインフォース（最後Omega-獲得Gain-力Force）」を身に付けたため理論上は無敵である。必殺技：グレイソードに触れたものを消し去る『オールデリート』とウォーグレイモンを模した左腕の籠手から出現させたデジモン文字で『オールデリート』と刻まれたグレイソードに炎を纏わせ、相手を斬りつける『グレイソード』とメタルガルルモンの形をした大砲から打ち出される絶対零度の冷気弾で敵を凍結させる『ガルルキャノン』だ。

デクスモン

世代/究極体 属性/ウイルス種 種族/解析不能

デジコア（電脳核）を持たないため、デジモンに分類されないプログラムの種類で仮の姿で現れるが実体は無い。デジコアを探知し体内

に取り込んで分解、二度と再構成できないように処理するという『プロセス0』、『プロセスF』を永遠に繰り返す。単純なプログラムのだが、倒すことは不可能な領域の存在だと推測されている。デジコアが無ければ活動を停止させるが、デジコアがある限りその活動を止めない。

アルファモン

世代／究極体 属性／ワクチン種 種族／聖騎士型

必殺技／デジタルライズ・オブ・ソウル、聖剣グレイダルファア

オメガモンと対をなす蒼いマントを翻す聖騎士型デジモンで、13体存在すると言われるネットワークセキユリティの最高位、聖騎士“ロイヤルナイツ”の1体である。聖騎士でありながら、聖騎士への抑止力的な存在だと言われており、通常時は姿を現すことはなく、“孤高の隠士”とも呼ばれ、“空白の席”と呼ばれる所に位置する。“ロイヤルナイツ”である。戦いにおいては過ぎ去った戦いを瞬間的に取り戻す究極の力「アルファインフォース」の能力を持つため、アルファモンの攻撃は一瞬にして終わるが、実際には何回の攻撃を繰り返したかは分からず、理論上、敵が倒れる最後の1撃だけを見ることがなる。両手からデジ文字の魔方陣を展開して攻撃と防御を行う。必殺技は魔法陣の中心に突き刺さった光の収束を抜き、敵を貫く『聖剣グレイダルファア』と、背中の翼を広げて飛翔し、上空より巨大な魔方陣を展開して、異次元より伝説上のモンスターを召喚する『デジタルライズ・オブ・ソウル』だ。

アルファモン究極戦刃王竜剣

世代／究極体 属性／ワクチン種 種族／聖騎士型

必殺技／究極戦刃王竜剣、デジタルライズ・オブ・ソウル

アルファモンが放ったデジモン文字の魔方陣の作用より、オウリウモンが奇跡的な進化を遂げ剣になった姿。オウリウモンは、さらなる戦闘力が追求された実験体「プロトタイプデジモン」の究極

体であり、剣になったところで、その戦闘力の全てが攻撃だけに専念される。王竜剣の一振りには、言わば究極体デジモンに内包された全パワーを扱う物であり、並のデジモンが振れる剣ではなく、並のデジモンが受け止められる剣でもない。必殺技は、王竜剣で相手をまっふたつにする『究極戦刃王竜剣』と背中の翼を広げて飛翔し、上空より巨大な魔方陣を展開して、異次元より伝説上のモンスターを召喚する『デジタライズ・オブ・ソウル』だ。

第2話 聖騎士と適合者の出会い（前書き）

なかなか構想が纏まらず時間がかかってしまいました。

第2話 聖騎士と適合者の出会い

「行ってきますー!!」

「いつてらっしやい」

公立大学1年生の青年 永島彰人は母親に挨拶をすると、あらかじめ友人たちと決めていた待合場所に向かっていった。

自分の第一志望の大学に入学してから初めての夏休みの真っ最中の8月のある日に、彰人は自分の幼馴染と遊びに行く約束をしていた。

「おはよう、彰人。いやー今日もいい天気だね」

「永島君、おはよう」

「ユウキ、詩織。おはよう」

指定していた予定時間よりも早く着いた彰人は待合場所で趣味の1つである読書をしながら数分待っていると、幼馴染である本村ユウキと伊藤詩織が来た。

2人とも学部こそ違えど、彰人と同じ大学に通っているのだ。

「相変わらず、お前は速いな。もう少し遅く出てきてもよかったんじゃないのか？」

「何を言っているんだ？ 何事も5分前行動が肝心さ。そうでないと、社会人になってからが大変だぞ」

「相変わらず、永島君はしっかりしているのね…… 昔も今も変わ

っていないというか……」

彰人は、元々すっかりした性格で前日に時間割を必ず整えるという性質なので遅刻するところを見るのがツチノコを探すことと同じくらい難しいとどこでも言われているほどなのだ。

「まあ、いいさ。行こうぜ」

「よっしゃー！！！！ 今日はいっさり遊ぶぞー！！！！」

「相変わらず元気ね、ユウキ…… まあ、元々今日遊ぼうと言いだしたのはユウキだけ……」

こうして、ユウキ発案の計画の元で3人は夏休み真つただ中の一日を思い切り楽しむべく遊び始めた。

ゲームセンターや古本屋などに行ったあと、昼食は行きつけのファミリーレストランで食事をした。

「ふふ〜ん、買った買った〜」

「ユウキ、これをアンタのこれを交換してくれない？ そうすれば、あたしもアンタもコンボが一つ増えるでしょ？」

「おお！！いいね！！」

「君たちは一体何をしてるのかな？」

行きつけのファミリーレストランで昼食を食べ終えた後、訪れた

家電量販店にあるカードコーナーで休憩兼カードの交換をしているユウキと詩織を見て、彰人は呆れたような表情をしながら、尋ねた。かく言う彰人も前からずっと欲しがっていたフィギュアを買ったので、人のことを言えるような立場ではないのだが、本人はそのような小さいことを一切気にしないのだ。

「いや……見ればわかるだろう。カードの交換だろう」

「さすがに……それは僕でもわかるけど……一体何のカードゲームなのかな？と思って……」

大学生にもなってカードゲームを熱中しているのは如何なものか？と言いたげな表情で問いかける彰人に、ユウキはムキになって答えた。

「デジモンだよ！！ お前知らないのか？ 例えば、これだな……有名なのは」

ユウキは彰人に1枚のデジモンのカードを渡した。そのカードには右手が狼みたいな形をしていて、左手が竜みたいな形をした白い騎士の絵が描かれていた。

「これは……オメガモン？ ……あつ、このデジモン見たことある！！ 今週の木曜ロードショーでやっていた映画に出てたデジモンか！！あまりのかつこよさに思わず口が開いていたよ……」

彰人は木曜ロードショーでやっていた『僕らのウォーゲーム！』を暇だったからたまたま見ていたのだ。

ところが、終盤に登場したオメガモンに思わず心を奪われてしまい、デジモンに興味を持ったのだ。

オメガモンの活躍を見た彰人は、余りのかつこよさに思わず口が開いてしまった。

ちなみに、彰人の住む世界はデジモンが世界中にアニメとして放映させていて、グッズも数多く出ている世界である。

「そうそう！！ お前も見ていたのか！！ いやー いいよな〜
かつこいいよな〜オメガモン。 あっ、それ5枚くらい持っている
やつだから1枚やるよ」

「いいのか？ 大切にとっておくよ」

ユウキは彰人に渡したオメガモンのカードをあげた。

どうやら、ユウキはこのオメガモンのカードを他にも何枚も持っているのだろう。

彰人はオメガモンの絵をまじまじと見ながら、デジモンに関する質問をした。

「ユウキ、詩織、デジモンのことでいくつか聞きたいことがあるけど、いいかな？」

「何だい？ デジモン関係ならある程度は大丈夫だぞ！！」

「何でも来なさい！！」

「もし、デジモンと一緒に生活できるとしたら誰がいい？」

彰人はユウキにデジモンファンならかなり悩むであろう質問をぶつけた。

ユウキと詩織は数分考えると、答えを出した。

「そうだな…… アグモンとガブモン。ジョグレス進化してオメガモン！　なんてね」

「私はブイモンかな……」

ブイモンはエクスブイモンに進化すれば、ステイングモンとジョグレス進化させてパイルドラモンにした後に究極進化させれば、インペリアルドラモンになる。

また、ブイドラモンに進化すれば、オメガモンやアルファモンと同じく“ロイヤルナイト”に所属するアルフォースブイドラモンになる。

更に、“奇跡”のデジメンタルによってアーマー進化すれば“ロイヤルナイト”に所属するマグナモンにもなる。

他にもアルフォースブイドラモンと同じく“ロイヤルナイト”に所属するデュナスモンや“四大竜”の一角であるゴツドドラモンにも進化することのできる（ゲームの話だが）極めて可能性も高い優秀なデジモンなのだ。

「成程…… では、反対にこの世界に来て欲しくない、このデジモンとは一緒に生活したくないと思うデジモンは？」

『ディアボロモン 映画に出ていた奴』

「オメガモンと戦ったあいつか…… 確かにネットに侵入されたら世界中が映画よりも大混乱する上に核ミサイルを全ての核保有国で一斉に、なおかつ同時に撃たれる確率も高いからたまらないよ。まあ、この世界に来る確率など皆無だけどね……」

彰人は急にふと思いついた質問をユウキと詩織に尋ねたが、2人とも即答で答えたことに加えて、自分と同じ答えに頷いた。

確かに、『僕らのウォーゲーム』の時よりもネットはいくらも強化されているのだろう。

だが、ディアボロモンの1段階前の状態である完全体のインフェルモンの時でも国家機密クラスの巨大なデータでさえもたったの1分もあれば、食べ尽くしてしまうのだ。

しかし、この時の彰人はまだ知らなかった。

現実世界に本当にディアボロモンが来襲して、世界中を大混乱に陥れることを。

そして、自分がそれに大きく関わることに。

「いや〜 遊んだ、遊んだ!!!」

「また3人で遊びたいね……」

「そうだな。社会人になればいつ会えるのか分からなくなるからな……」

その後、メイド喫茶などに行った3人は帰り道を歩いていた。

「それじゃ、俺たちはここで。またな」

「また遊ぼうね!!!」

「ああ。また会おう」

そして、3人は別れて、それぞれ家に向かって帰っていった。

彰人にとって、自分の幼馴染であるユウキと詩織は大切な友達だっ

た。
大学で真面目に勉学に勤しんでいる彰人でも、大人になってからの日々も大切だが、大人になるまでにどのような経験を積んだか、どんな日々を過ごしたか、どんな友達に出逢えたかも大切だと考えているのだ。

「さてと……今日の夕ご飯何か……？　ん！？　何だ？」

(　　)

自宅に向かって帰っている途中で公園のそばを通った彰人は、そこで不思議な音楽を聞こえてきたので足を止めた。

(何だ？　この音楽は……どこか優しくも力強い……そんな感じがする……)

彰人は、音楽に耳を傾けるのではなく、音楽に身を沈めることで、全身に音楽が染み込むようにした。
彰人からしてみれば、それこそが正しい音楽の鑑賞法だと思っているのだ。

(？　何だろう？　これは……)

彰人は音楽に身を沈めていると、公園の中で光っている物を見つけた。

彰人は公園の中に入ると、その光っている“何か”を拾った。

「メモリだな……これは。　でも、何でこんな所に……？　誰かが

落とした？ いやいや、落としたとしてもこんな所に置いておくか？ 普通は。それにしてもひどいな…… こんな所に捨てるなんてちゃんとハー○オフに売りに行かなきゃ駄目だろう…… こんなモラルの無い人間がいつの世でもどこの世界でもいるんだな……」

彰人は、メモリを見ながらブックサ文句を言っていた、その時だった。

「私の声が聞こえたようだな…… 流石は適合者だ」
デュナミスト

メモリから声が聞こえると、メモリが光り輝き、その光に彰人は包まれた。

彰人が拾ったのはオメガモンのデジメモリだったのだ。

「うわっ!!」

彰人は余りの光の眩しさに目を閉じてしまった。

(…… ここはどこなんだ？ 僕は誰に呼ばれたのだろうか？ 僕はこれから何をするのだろうか？ 世界を護るべく戦うため？ でも、僕は“彼”みたいに勇敢でも無ければ、優秀でもないただの凡人だ。そんな僕に一体何が出来るのだろうか？)

彰人は恐る恐る目を開くと、自分が光に覆われた世界にいることに気がつき、自分がこれから成すべきことを考えていた。

すると、彰人の目の前に光が現れて、次の瞬間に、白を基調とした鎧に身を包み、左腕にはオレンジを基調としたアーマーを装着し、

手には竜の頭のような手甲を装備し、反対の右腕には青を基調としたアーマーを装着し、狼の頭を模した手甲を装備していて、背中には外側が白色、内側が赤色のマントをはためかせた聖騎士がおぼろげな姿で存在していた。

その聖騎士の姿を見た彰人の脳裏にある言葉が浮かぶ。

「貴方は……オメガモン!?」

空色の瞑らな瞳をしたオメガモンの顔を見上げながら彰人が尋ねる。

オメガモンは肯定の意を表すように頷いた。

「貴方が…貴方が僕を呼んだのか?」

「その通りだ……永島彰人。私は、デジタルワールドの守護神であるロイヤルナイツの一員だった。だが、理由あって私はデジモンたちを抹殺し、デジタルワールドに更なる混乱を呼び、最後には同じ聖騎士であるアルファモンと戦い、倒された。しかし、私は気がついていたらデジメモリになってこの世界に流れ着いた。体が動かない私は私の声を聞くことの出来る適合者^{デユナミスト}を探していた。そして、君に会ったのだ」

オメガモンが若い男性のようであるので、威厳のある声で話していたので彰人は少し面食らいながら、圧倒された。

彰人は、オメガモンが話したところを見たことが無いからである。

「先程も言ったが、君は私の声が聞くことの出来る適合者^{デユナミスト}だ。君は私をパートナーデジモンとして使役することが出来る権利がある。もし、この世界に君を狙うデジモンやこの世界を脅かそうとするデジモンが来れば、私は全力で君とこの世界のことを護り抜く……我

が剣と大砲、そしてロイヤルナイツの称号と我が名前に誓おう！」

オメガモンは、そう言うのと肩膝をつき、彰人に頭を垂れた。

「デュナミスト 僕は才能も頭脳も力も何もないただの人間だ。正直言つて、デュナミスト 適合者の中でも最低ランクだろう。それでも……僕に出来ることがあるのならば、僕は喜んで貴方の適合者になるう！！デュナミスト 貴方が僕のことや世界を護るのならば、僕も貴方のことを守る。その上で、食事や寝床を保証しよう……僕の存在全てにかけて！！」

デュナミスト 彰人はオメガモンの決意を知つて暫く考えると、オメガモンの適合者になることを決意した。

彰人は自分はデジモンのことをよく知らないし、周りの人間みたいに決して強いわけでも凄いわけでも優秀なわけでもないただの一般人であることを十分に理解していた。

しかし、ここでオメガモンのことを見捨てたら、何だか後悔する気持ちに襲われたのだ。

オメガモンにもぬぐい去れない過去があるように、彰人にもぬぐい去れない過去がある。

“手を伸ばせば届くはずなのに、手を伸ばさないことは一番辛いことだ”

それがそのぬぐい去れない過去から得た教訓だ。

もう二度とあの時の間違いを犯さないように彰人は変わっていった。今までの彰人は、しっかりした計画を立てることが出来ても、計画などを実行する時に二の足を踏んで失敗することが多かった。

しかし、今の彰人はもう躊躇しない。

果敢に攻める、そんな自分に生まれ変わり、前に進めるようになった。

「わかった。それでは君を私の適合者^{デュナミスト}と認めよう。よろしく、彰人」

オメガモンは嬉しそうに彰人に右手を伸ばすと、彰人も右手の拳を握り締めてオメガモンの右手に当てる、契約を成立させた。

彰人は確かに怖い気持ちもあるが、それ以上に責任感の方が強かった。

自分より優秀な人や凄い人よりも、オメガモンは実際に自分を選んだ。

こんな自分にも何か出来ることがあつて選んだのか、それともただ声を聞いただけで選んだのかまではわからない。

なので、選ばれたからには精一杯やることをやってその上で責任を果たそうと考えた。

「それじゃあ……行きましょうか!!!」

彰人は光に包まれるとオメガモンと共に空間から姿を消して、再び公園に姿を現した。

彰人は、自分が見た全てが夢の中での幻だったのかと思ったが、その手にはデジヴァイスがしっかりと握られていた。

「あれ？ これは何だ？」

『デジヴァイスだ。流石にあの姿で街中を歩くと、君に大きな迷惑をかけてしまう。そこで、このデジヴァイスの中にいれば、私自身トレーニングも出来るうえに、君をいざという時に^{リヴァイス}実体化すれば、君を守ることが出来るから一石二鳥だろう？』

「確かに……」

デジヴァイスの形は、縁どりが金色で周りをオメガモンの同じ白

亜の鎧を模したデザインをしている『デジモンテイマーズ』のD・アークだった。

「取り敢えず帰ろう。時間も遅いし、お腹も空いたし。あと、両親には僕から話しておくね」

「ああ、頼む。君に何かのことがあったら、両親に迷惑をかけることになるからな」

彰人は、デジヴァイスの中にいるオメガモンと会話をしながら、夜道を歩いて自宅に向かっていった。

それを黒いローブで全身を覆い包んだ者が見ているとは知らずに

……

自宅に帰った彰人は、早々にオメガモンのことを説明し、家族に了承を求めた。

本人曰く、“面倒なことはさっさと終わらせるに限る”とのことだそうだ。

すっかりした性格の彰人を信じている両親は彰人が思ったよりすんなりと了承してくれたので、オメガモンは実体化して改めて挨拶した。

実は、帰り道で初めて見た時のオメガモンの身長が余りにも高かったため、オメガモンの図体が図体に部屋に入らない事に果たしてどうすればいいのだろうか？と悩んでいた彰人だったが、実体化した時に2m程に縮小したオメガモンを見て、そんなことも出来るのか、と感嘆した。

オメガモンの姿を見た彰人の両親は驚きつつも、“彰人をどうかよろしく願います”とか“どうか彰人の馬鹿を叩き直してください”だの好き勝手言いたい放題だったので、オメガモンは思わず困惑してしまい、当の好き勝手言われ放題の本人である彰人は思わず苦笑いを浮かべてしまった。

その後、家族とオメガモンで夕食を食べた時に、彰人はオメガモンに質問した。

「なあ、オメガモン。君は食事を取ることは出来るのか？」

オメガモンの顔をまじまじと見た彰人はオメガモンに質問した。ここで、彰人のオメガモンの呼び方が、“貴方”から“君”へと変わっているが、契約したことで他人行儀のままなのは、如何なものかと考えて変更したのだ。

「ああ、問題ない。食事の仕方は君たち人間とは異なるが、摂取することはできる。あつ、彰人のお母さん、ご飯お代わりありますか？」

「ありますよ。しかし、たくさん食べますね。やはり、世界を護る騎士の仕事は大変なのですか？」

オメガモンは大丈夫だと彰人に微笑みながら話しながら、ご飯のお代わりあるかどうかの彰人の母親に尋ねた。

オメガモンは、デジタルワールドとは違った世界の食事を始めての食感や味に感激しつつも、食べていた。

「それもありますよ、我が故郷であるデジタルワールドでもこんな美味しい料理を食べた事がありませんから。腕の良さも相まって本

当に美味しいですよ…… 彰人君が本当に羨ましいですよ……」

オメガモンは自分の茶碗にご飯を盛りながら、彰人の母親の料理を褒めつつも、羨ましそうな視線を彰人に向けた。

「……」

彰人はただただ困ったような表情をすることが精一杯だった。

夕食を終えて、オメガモンは初めての風呂に入ってみたのだが、あまりの心地よさに何と2時間も入ってしまい、永島家に大きな迷惑をかけてしまった。

「すみません…… デジタルワールドにはこのような物がなかったのでつい……」

オメガモンは風呂から上がって体を丁寧に洗った後、時計を見たら2時間も風呂に入っていたことに気がつき、慌てて謝った。

「別にこれくらい大丈夫ですよ」

「そうそう。オメガモンさんは私たちの家族なんですもの」

ところが、彰人の両親はすんなりと許してくれたので、オメガモンは感謝してまた再び頭を下げた。

「何だか、迷惑ばかりかけてばかりだな……」

「そんなことはないよ。世界が変われば、生活も変わるよ。慣れれば、どうということはないさ。それよりも、僕の方が親に迷惑ばかりかけてばかりだよ」

自分の部屋にいつでも寝れる体勢を整えた彰人は、オメガモンと会話を始めた。

オメガモンは彰人に自分のいたデジタルワールドという異世界の話をした。

彰人は、オメガモンの話に半信半疑になりながらも色々な事を聞き、質問した。

「へえ〜 やっぱり世界は広いな…… 僕が知らない世界が山ほどあるなんて……」

彰人は、オメガモンから聞いたデジタルワールドの話を中心に信じた。

というよりも、目の前にそのデジモンがいるから信じざるを得なかったのだが。

「ああ。私もデジタルワールド以外の世界を初めて知ったよ。なかなか居心地がいいが、私の住む世界ではない」

「そうかな。ここにいるのも悪くないとは思っちな」

オメガモンはやはり自分は戦いに身を置く者だということをはひしと感じていた。

「詳しい話はまた明日にしよう。よろしくな」

「こちらこそ」

寝る前にもう一度拳と拳を合わせて、オメガモンはデジヴァイスの中で、彰人はベッドで眠りに落ちた。

彰人は夢の中でオメガモンの今までの日々を見た。

白い刀身の部分にデジモン文字で『initialize（初期化）』

と書かれた大剣 オメガブレードが白いリングーホーリーリングに姿を変えて、そのままオメガモンの胴体に変形した。

そして、右腕に変形したメタルガルモンと左腕に変形したウォーグレイモンと合体して、オメガモンが誕生して、その圧倒的な力で様々な敵を薙ぎ払っていく。

そして、ロイヤルナイツに加入してからも変わらず、デジタルワールドとデジモンたちのために毎日戦い続けているオメガモンの姿を見た。

（すげえ…… オメガモンって凄く強いんだ…… そりゃそうだよな…… デジモン2体以上のパワーがあるんだから……）

オメガモンの姿を見ながら、彰人はオメガモンの凄さを改めて思い知った。

それと同時に、自分に課せられた責任の重みをひしひしと感じた。

（僕は、本当に凄いデジモンのデュナミストになってしまったのか……）

彰人はそう思ったが、後悔は何一つ無かった。

だが、ある日イグドラシルから下されたデジモン抹殺の命令を聞いて、NEWデジタルワールドに逃げ込んで来るデジモンたちを見て、抹殺するのかわりで苦悩するオメガモン。

悩んだ末に、自らグレイソードを振り、ガルルキャノンを撃ち、デジモンたちを抹殺し始めたオメガモン。

ドルゴラモンと戦い、敗北の瀬戸際まで追い詰められたが、X進化して大逆転勝利したオメガモン。

死のX進化で誕生したデクスドルゴラモンのデータの破片から誕生したデクスモンに一人果敢に立ち向かったが、自分の必殺技も相手の攻撃も通じない千日手状態になって途方にくれるオメガモン。

アルファモンと自分の掲げる正義のために戦い、敗北したオメガモン。

彰人はそれらを見終わった後、一人空間に取り残された。

(オメガモン……もし、これが僕だったらどうしていたのだろうか?)

彰人は、自分の本心に嘘をついてかつて自分が護って来たデジモン達を抹殺するオメガモンを見て、悲しみと不安に心を染めていきながら、考えた。

(もし、自分がオメガモンの立場にいたとしたら、果たして何をやるのだろうか?自分の性格ならば、イグドラシルに反逆して、イグドラシルを破壊するだろう。しかし、後先考えない行動で、より多くの者を傷つけて、死なせることが果たして正しいのだろうか?そんなことが正しいと言われるほど世界は決して優しくはない。オメガモンだって本当はイグドラシルに反逆したかったのだろう。しかし、イグドラシルがいなくなった後のデジタルワールドの管理は一体誰がするのか?やはり、何か大きなことをやるには、誰かを批判する

には、自分の考えだけではなく、それに代わる物を用意しなければならぬのだ。オメガモンも精一杯悩んで、結論を出した。悩んだ末に出した結論で動いた結果、一度死んでここにいる)

そう考えた瞬間、彰人は何だかオメガモンに親近感が湧いた。

結局、デジモンも人間も大差のない生物である。

彰人は、デジモンと人間がお互いに歩み寄れば、分かり合うことのできる可能性があることを感じた。

「……」

『彰人！！ 敵だ！！』

その時、彰人は何かの気配を感じ、オメガモンも同様にその気配を感じて、敵と断言した。

「なるべく周りに被害を出さないように頼む」

「ああ。空中決戦だな」

急いで灯りを付けてデジヴァイスを手にとると、窓を開けて空に向かってデジヴァイスをかざした。

「オメガモン、リアライズ実体化」

彰人が宣言した瞬間、オメガモンは姿を現し、大空に飛び立った。

「……」

オメガモンが注意深く周りを見渡していると、突如としてオメガ

モンの背後の空間が歪み、その中から背中に羽を生やし、頭部には角のようなものを二本備え、顔の部分は単眼の形して、三本爪の両の掌にも目玉がついているデジモン。デスモンが姿を現した。

「ふっ…… 相手にとって不足なし、というところか」

「“終焉の聖騎士”、オメガモン…… 貴方には何の恨みは無いが、我がテイマーの目的のため死んでもらう!! グレイクロー!!」

「ふっ!!」

言葉と共に振り下ろして来たデスモンの爪を、オメガモンは瞬時に移動する事で避けた。

しかし、その隙にデスモンはオメガモンから離れて、ある程度の距離を離れると、デスモンはオメガモンに向かって両掌に存在している邪眼を構え、攻撃を撃ち出す。

「デスアローー!!!」

「ガルルキャノン!!」

オメガモンはデスモンが両掌に存在している邪眼を構えた時にはもう既にガルルキャノンを展開して、デスアローに向かって砲撃を撃ち出した。

デスアローとガルルキャノンはお互いに激突すると、凄まじい爆音が辺りに響いた。

「お前が何故ここにいる？」

「……つまり、デスモンは自ら戦っていたのではなく、何者かの命令によって無理やり戦わされていた、という訳だな」

次の日の朝に、彰人はデジヴァイスの中にいるオメガモンと昨夜未明にあったデスモンとの戦いの一部始終を聞いた。

『そうだ。本人も本当はやりたくはなかったと言っていたからな』

「……だとしたら、最悪のテイマーだな、そいつは。デジモンの命を軽く見ている野郎だ。絶対に許すわけにはいかないよ」

彰人は、怒りで拳を強く握りしめながら話した。

「何はともあれ、お疲れ様、オメガモン。ゆっくり休んでくれ」

「ありがとう。また何かあったら呼んでくれ」

オメガモンとの会話を終えて、自分の部屋から空を見ている彰人は、これから自分に襲いかかる困難とデジモンたちに思いを馳せた。

「全員かかってこい。いつでも相手になってやるぜ、僕たちは」

彰人は、いつでも意気軒高だった。

何処かの街の一軒家

「結局失敗したわね、あなたのデスマンは。だから言ったでしょ、絶対に失敗するって」

蒼い瞳をした美少女 ジルがデスマンに取り付けていたビデオカメラの映像を見て、あきれ果てたように話した。

「はあ〜 向こうにオメガマンがいるなんて完全に読み間違えたわ…… 全くデスマンも役たたずね……」

赤い瞳をして、腰まで届く長い黒髪を後ろでまとめた美少女 青山さくらが死んだデスマンを責めるような言い方をした。

「そうになると、俺がそいつを仕留めないといけないようだな。全く、何であんな奴がオメガマンの適合者なんだよ。俺の方が適合者としては最高なのに……」

完璧なデジモンオタクな中学生 切原正樹は彰人のことを恨んでいるみたいだ。
どうやら、オメガマンの適合者^{デユナミスト}は彰人ではなく、自分だと思っ込んでいるようだ。

「まあ、いいや。あいつには絶望という名の地獄を見せてやる必要があるな…… ふふっ、ふふふ…… さあ、世界よ、地獄を楽しみな！……」

正樹はジルとさくらを自分の横に侍らせながら、彰人とオメガマンをどのように倒すか妄想していた。

第2話 聖騎士と適合者の出会い（後書き）

デジモン紹介

デスモン

世代／究極体 属性／データ種、ウィルス種 種族／魔王型、
必殺技／デスアロー、エクスプロージョンアイ

デーモンと同じく元々は高位天使型デジモンだったが、ダークエリアに墮とされ魔王型デジモンになってしまった。しかし墮天使型や悪魔型デジモンと違い、中立の立場を常に守り世界を静観している。通常は体の色が灰色でデータ種だが、天使型のデジモンとの来るべき決戦時になると体が闇色に染まり、ウィルス種の破壊神へと変貌する。変貌した後は、無駄な戦闘を避けて蓄えていたパワーを開放し、破壊の限りを尽くすと言われている。必殺技は、両手の邪眼から死の矢を放ち、敵を貫く『デスアロー』に、頭部の単眼が深紅に輝いた時に発射される、破壊光線『エクスプロージョンアイ』だ。

第3話 適合者の訓練と実践（前書き）

以前活動報告に書きましたが、『デジモンデータベース』がなくなってしまうのでデジモンの紹介の検索が大変になりました。当たり前前に思っていたものがなくなることの重大さを改めて思い知らされました。

第3話 適合者の訓練と実戦

彰人とオメガモンが出会ってから、一ヶ月の月日が流れた。その間には、デジモンの襲撃が一切無く、彰人とオメガモンを含めた多くの人々は平和な日々を過ごしていた。

しかし、彰人とオメガモンは決して何もしていなかったという訳ではなかった。

再び来るであろうデジモンの襲撃に備えて、体を鍛えたり、精神修行を行なったり、デジモンのことを学習したりと様々なことに忙殺される日々を送っていた。

彰人は、夏休みのある日の午前中に、体育館に行つて外周を走ったり、トレーニング器具を借りて体を鍛えた後に通る帰り道を歩いていた。

「正義か……」

『そうだ。自分の貫きたい信念や正義は彰人にはあるのか？』

彰人は、腰につけているデジヴァイスの中にいるオメガモンと共に帰り道を歩きながら、自分が持つ正義について考えていた。

「僕、高校生の時に一度大地震に遭ったんだ。その時に、足の不自由な人を助けたのは良かったけど、今度は自分がピンチになって…… 馬鹿だよ、誰かを助けようと思ったら、自分がピンチになって。それで、ああ、僕、死んだなと思ったら……結局助けられたんだ、救助隊の人に。後で、助けた人の家族や救助隊の方々から『ありがとう』って言われて…… その時に思ったんだ。頭も良くない、勉強もそんなに出来ない、運動神経もいい方ではない、おまけ

に顔もいいわけでもない、そんな僕でも何か出来ることがあるんだ、
って思ってたんだ」

彰人は笑顔でデジヴァイスの中にいるオメガモンに、いつの間にか笑顔で話しかけていた。

彰人は、自分の中では良いところも取り柄も何一つない人間だと考えていたから、オメガモンに出会えたのは嬉しかったのだろう。

「その時に、オメガモン、君に会ったんだ。何でかは今でもわからないけど。でも、いいんだ。いつか、わかる日が来るって信じてるから。それで、君に会って自分が何をしたいか、について考えていたけど、僕の家族や友達、外国に行った時に知り合った人たち、僕に関わってくれた多くの人たち、僕がまだ見ぬ多くの人たち……そういう人達を自分は守れるんだ……って思ったら……本当に嬉しかったんだ……だから僕は守る為に使いたいんだ。自分の力……いや、君の力を……！」

彰人は、自身の考えるオメガモンの適合者^{デュナミスト}としてのあり方、力の振るい方をオメガモンに話した。

彰人は、自分の経験から、オメガモンの力を守るための力として使いたいと考えていたのだ。

『それが彰人の貫きたいことなのか？』

「ああ。嘘偽りのないことだ」

オメガモンの問いに彰人は胸を張って答えた。

デジヴァイスの中にいるオメガモンは彰人の答えを納得したように頷きながら、彰人に質問をぶつけた。

『そうか。それならば、尋ねよう。彰人が護るために振るう力とは一体何だろうか？』

彰人の幸福は、ロイヤルナイツでも最強を謳われた聖騎士の適合者^{スト}になったことである。

しかし、不幸なことにロイヤルナイツという存在の適合者^{デュナミスト}になったことでもある。

何故なら、ロイヤルナイツとは13体の聖騎士がそれぞれ異なった正義・信念・規則を持つ聖騎士の集団であるからだ。

そして、オメガモンの問いは、オメガモンが彰人に会うまでに経験した出来事と大きく関係していたからだ。

「僕もそれは一体何なのかについて考えた時があったんだ。オメガモンにもぬぐい去れない過去があるけど、僕にもぬぐい去れない過去があるんだ。僕は行きたくはなかった高校に行ってたんだ」

『行きたくはなかった高校？』

彰人の過去話にオメガモンは興味を持ち、彰人の話を気づかない間に真剣に聞き始めた。

「高校入試に失敗して併願で既に受かっていた私立高校に僕は通っていたんだ。でも、そこは僕に合わない高校だったんだ。学力の面でね。そのせいか、授業は真面目に受けずに内職ばかりやっていた。でもテストはいい点取ってクラス1位をキープし続けたけど。入学した当時から、僕はもう一度上に這い上がるために必死で勉強を始めたんだ。それで、クラスメイトとは反発し、次第に孤立していた。でも、それで良かった、と自分を納得させていた。あんな低俗な奴らと一緒にならずに済むんだ、僕がいるべき場所はどこではなく、もっと高く優秀な場所なんだ、って考えていた。今思うとあの

時は地獄のような日々だったと思うよ。だって、生きている実感がなかったもの……」

『…………』

彰人の過去にオメガモンは絶句して言葉が出なかった。

何故なら、オメガモンの知る彰人は、真面目で優しくも、向上心を胸に秘めた努力家だったからだ。

でも、それらの背景には高校時代の経験があったと思うと何処か納得できるものがあつたのか、オメガモンはまた話を聞いていた。

「生きている実感が欲しかったから、日常に退屈していたから僕は正義に憧れたかもしれない。だから、僕は他人に迷惑をかけている不良だけを相手に喧嘩を挑みまくった。まあ、最初の内は負けてばかりだったけど、そいつらと同じ不良だったけど今は同じ大学に通っている友達的美藤達也や色んな人に会って喧嘩のやり方を教わったら、勝てなかった奴にいつの間にか勝てるようになって、師匠の達也にも勝てるようになったんだ。その時からかな…… 圧倒的な力で誰かを過剰に痛めつけるようになってしまったのは…… そのせいで誰も近づかなくなっただし、人助けをしても誰も感謝をせずに僕から逃げていったんだ…… そんなある日、以前僕に負けた奴が金属バットを片手に僕に挑んだんだ。僕は無論返り討ちにしたけど、その時に金属バットが彼の目に当たって、彼は失明してしまったんだ。その後、僕は彼の両親に事情を説明して謝ったけど、当然許してもらえず罵声を浴びまくる等の散々な目にあつた。それに、普段怒らせたことのなかった両親にもかなり怒られて、顔が腫れて筋肉痛で次の日もまともに動けなくなるくらいボコボコにされたよ」

『…………』

その時のことを思い出したのか、悲しそうな顔をする彰人を見て、オメガモンは自分の行いのことを思い出したのか、無言を貫いていた。

しかし、彰人はすぐに真剣な表情に戻ると、話を再開した。

「その後、必死で勉強して第一志望大学には合格したけど、今でもその出来事を夢で見ると。それで、わかったよ。僕が振るっていた力は、力は力でも自分の気に入らない・意にそぐわない相手を一方向的に傷つけて相手を支配するための力だったんだ。それじゃ、皆が離れるのを無理もないね。だから……僕は諦めない人たち、誰かを守るために力を振りたいな」

彰人は、高校時代にもう既に知っていたのだ。

相手を傷つけないで、制圧する力は護る為に在るわけではないということを。

そして、戦わずしても得る事が出来る誰かの温かさを自分が失っていたということも。

戦えば確かに得られるモノも在るけど、戦わなくても得られる物も確かに在る。

彰人は、力を振るって得られる快感ばかりを感じて何時からか普通の歩みだけで得られていたはずの温もりを見失っていたのだ。

「オメガモン、僕のようになってしまうたら終わりなんだ。あれから確かに人々との絆は取り戻せたけど、未だに僕に近づかない人も多いのが現実だ。だから、僕はもう過去の自分に戻らないようにしているんだ。もう二度とあの自分にだけはなりたくはないんだ」

「そうだな…… 私もいつも悩むが、力とは本当に難しいものだ。

確かに、力は確かに戦いを呼ぶ原因になる可能性が高いことも事実だ。だが、可能性が高いだけの話であって、決してそれだけが原因

であるとは限らない。何故なら、災いや争いを呼ぶのは力を持つ者の意志だからだ』

「意志なのか……」

オメガモンの呟いた言葉に彰人は首を傾げながらも納得したが、オメガモンからしてみれば、争いを呼ぶのは意思しか考えられなかった。

「力はいくまで付属するものでしかないからな。それならば、何故戦争が起きるのだろうか？ それは戦いを求めている意思や、世界を支配したいと言う意思や、何らかの生物を滅ぼしたいと言う意思が存在するからこそ争いや災いや悲劇は起きるのだ」

「なるほど……」

ロイヤルナイツとして、ジヨグレス進化したことで通常のデジモンの2倍の様々な戦場をくぐり抜けてきたことになるオメガモンでしか話せない言葉の重みを噛み締めながら、彰人は力を守るために使うためには何が必要なかを真剣に考える。

『強くなりたいよな？ 最初に言った自分になるためには！！』

「強くなりたい！！ もう二度とあの過ちを繰り返さないように！！」

オメガモンの問いに彰人は、拳を強く握り締めながら答えた。

『よし、それならば特訓を2倍に増やすぞ！！』

「4倍でいい」

オメガモンが彰人の決意を聞いて、練習のメニューを2倍に増やすと言ったのを彰人は4倍にすると言ったのだ。

『ふっ…… 火がついたか。まあ、いい』

「精神修行もしたいから滝も見つけないとだな…… それと寺に修行しに行くのもいいかもしれない……」

これからのトレーニングに思いを馳せながら、彰人とオメガモンは家に着き、昼食にした。

「随分と理由ありの適合者デュナミストなのね……」

「そうね…… 次、あなたの番なんだから絶対に仕留めなさいよね」

永島家を見ている者が2人いた。

一人は、蒼い瞳をした美少女 ジルで、もう一人は、赤い瞳をして、腰まで届く長い黒髪を後ろでまとめた美少女 青山さくらだった。

「わかってるわ。第一、あんたがしくじったんだからいけないことをわかってよね……」

ジルは、美しい顔を潜めながら、さくらに話しかけた。

「でも、やるしかないじゃない。でないと、あいつに……」

自身のパートナーデジモンであるデスモンがオメガモンに歯が立たなかったことを知っているさくらは、ジルに確認の意味を込めて言った。

「そうね……」

ジルとさくらは、自分たちが狙っている敵を見ながら捕食者のような目をしていた。

数日後、彰人とオメガモンはとある場所で山籠りを行っていた。修行の内容はオメガモンが彰人に隠れて見ていたとあるアニメ（オメガモン曰く勉強で見たアニメ）に影響されて作ったメニューで、彰人は思わず卒倒しそうになったほどだった。

オメガモンが自分一人だけで造ったグラウンドを彰人は丸太を抱えながら、ひたすら走っていた。

「……トロトロ走るな!!! まだまだ道は長いのにこの有様では戦いには勝てないぞ!!! 私の楽しみはお前の苦しむ顔を見る事だ!!! 文句があるならメニューを早く終わらせてからたっぷり聞けぞ!!!」

オメガモンはランニングを続ける彰人を見ながら、罵声を浴び続ける。

「くっ!!!」

体力の限界からか、彰人はグラウンドに倒れ込んだ。

「もう、終わりか。25kmしか走れないのか、お前は。マラソン選手を見てみる。男性も女性も42,195kmを走っているぞ。情けないものだな。同じ人間なのに、悔しいと思わないのか？ こんなところでへばっている場合か！ 私はそんな奴をデユナミスト適合者に選んだ覚えは無いぞ！」

軍隊の教官顔負けな口調で彰人をあざ笑い、コケにしているオメガモンは、左手に装備しているグレイソード、ではなくバンブーグレイソード（グレイソードの竹刀版）で彰人を力の限り殴った。とはいえ、血を出さないようにうまい力加減で殴っていることがポイントだ。

オメガモンのその行為によって、彰人の怒りが爆発した。

「くそー！ー！ー！！ やってやるわ！！！ あと半分くらい走ればフルマラソンだろう！？ だったら、何周でも走ってやるわ！！！」

倒れて、オメガモンのバンブーグレイソードによって殴られた彰人は、オメガモンの言葉に感化されて丸太を抱えて立ち上がり、再び走り始めた。

「……………（単純というか何とやら…………… “怒りは絶望より勝る” だったか…………… とある映画から学んだが本当にその通りだな…………… 今度、人間の心理学を独学で学びたいな……………」

鬼の心で彰人と接するオメガモンだったが、決して嫌がらせでやっているわけではなかった。

彰人の思いを知って、お互いに強くなろうと約束したものの、どう

鍛えればいいのかわからなかったが、体力・精神共にいい修行になるとの判断でこの訓練を行なっているのだ。

強くなりたいたいと言っている彰人のためにオメガモンはこのメニューを作ったのだが、果たして上手くいくのか本人にもわからなかった。しかし、自分を信頼して共に歩むことを約束した相手を信じられないうでどうする、との思いがオメガモンにはあった。

（彰人の弱さは、体力面よりもメンタルだ…… 長丁場の戦いに耐え切れるようにならなければ意味がないからな…… だが、この訓練を終えれば少なくとも自信と気迫はつくだろう…… たぶん）

この訓練の計画兼実行者であるオメガモンですら、この訓練で彰人が変われるのかどうかわからなかった。

しかし、彰人は絶対に変わると信じるしかオメガモンには出来なかった。

「終わりました！」

「よし、昼食を取っていいぞ」

ランニングを終えた彰人に、オメガモンは昼食を食べるように言う。と、昼食後から使うフィールドの整備に取り掛かった。

「いいかつ！ 今のお前は人間以下だ！！ 名もなき生物だ！！だが、私の訓練に生き残れたその時、お前は正真正銘の人間となる！それまでは死んだも同然の存在だ！！」

昼食を取って休憩した後は、60センチ程度の棒を両手で持ちながら背面ほふく前進をする訓練だ。

ただし、彰人の頭上にはマス目のように張り巡らされた有刺鉄線が

ある。

下手に顔を上げたりしたら、とんでもないことになるのは目に見える。

「私はお前を憎み軽蔑している！ 私の仕事はお前の心から弱い物を見つけて、切り捨てる事だ！！戦いの足を引っ張る弱さは容赦しないから覚えておけ！！」

そしてそれを超えたら今度はオメガモン特製の10メートルの塀を乗り越える訓練に突入だ。

塀と言っても足をかける場所も手で掴む場所もあるので、普通に頑張れば出来るレベルだったので、彰人はすんなりと終えた。

「笑う事も泣く事も許さない！ お前は人間ではない！！ 世界の守護神になるための生体兵器だ！！戦わなければ存在する価値はない！ 隠れて震えているのがお似合いの臆病者に負けたくなければ気合を見せる！！」

次は彰人に銃剣（オメガモン特製）を持たせて、藁人形に突き刺す訓練だ。

ちなみに、藁人形に貼ってある顔写真は彰人が最も嫌っているデジモンのルーチェモンだ。

彰人は疲れも感じさせず、むしろ闘志を燃やして藁人形、特にルーチェモンの顔の部分を中心に刃を突き刺していく。

「わざと負けて目立ちたいのか！ 痛い振りをして同情を引きたいのか！！この負け犬根性の人間が！！ 戦いはそれでは生き残れないぞ！！」

ルーチェモンの顔写真がいい感じで穴だらけになったところで、

次は棍棒を使ってオメガモン（左手にグレイソードではなく棍棒を装備して）と彰人のど付き合いが始まった。

なお、安全のために棍棒の先にはクッションを入れてあるので、幸いなことに致命傷にはならない。

だが、これが結構当たると痛かったりするのがポイントだ。

「ドオリヤー！！」

「ハア！！」

「グハア！！　ハハハハハハハハハハハッ！！　これだ！！　これが生きているって実感なのか！！　もつと僕を楽しませろ！！　オメガモン！！！！！！」

「ウオ！！　ハハハハハハハハハハハッ！！　そうだ！！　彰人！！　お前は生きてる！！　絶対にお前は強くなれる！！」

彰人は、ただ生き残るために、オメガモンを叩き潰すために目をぎらつかせながらオメガモンを叩きのめそうとする。

オメガモンも同様に彰人を叩き潰すために左手の棍棒を使って彰人を叩きのめそうとする。

辺りに鈍い音が響き渡る中、彰人の苦痛の声だけが上がるが、むしろ本人は笑いながらやっている。

まるで、その姿はブラックウオーグレイモンみたいだった、と後でオメガモンが苦笑しながら語っている。

「とろとろ走るな！　もう走れないというのならこの場でガールキヤノンを口に喰らわせるぞ！！　本当にお前は駄目な奴だな！！　与えられた職務も課題も録に達成も出来ないとは、社会に出ても負け組当然だ！！」

訓練の最後はフルマラソンだった。

なお、完走しないと今日は夕食を食べてはいけない事になっているので、彰人はかなり必死に走っている。

無論、デュナミスト適合者だけに走らせて、自分は走らないのは不公平で体に悪いとのことオメガモンと一緒に走っているが、格の違いか涼しい顔をしている。

「お前の相棒はそのデジヴァイスだけだ！！ 信頼できる仲間以外の何物も必要ない！！ それらを大切に、心から磨くように！！」

フルマラソンは予想よりも早い夕方くらいに終わったので、次に彰人はあらかじめ泥だらけにしてあったデジヴァイスを磨がいた。彰人は、しっかり愛情を込めてデジヴァイスを綺麗に磨いた。

「ふふ…… 信頼できる仲間ってのは、その人と一緒ならば、例えば相手が100人だろうと全然大丈夫なものなのさ……」

この時の彰人の目は、デュナミスト適合者としてふさわしい目だったと後でオメガモンは胸を張って答えている。ちなみに、洗脳ではないか等という意見は一切オメガモンは聞かないことにしている。

それが終わって、オメガモンは正式に彰人に訓練の終了を告げると、デジヴァイスの中に戻り、訓練場を元に戻して自宅に向かって帰っていった。

「お代わり!!」

「あらあら、凄い食べるのね……」

訓練が終わって帰宅したオメガモンと彰人は待ちに待った夕食を食べていた。

彰人は、かなり空腹だったようでもう既に5杯はお代わりをしている。

「何しろ、軍隊並みの訓練をさせたから、これくらいは食べると思えますよ」

「オメガモンさん、一体何の訓練をさせたのですか？」

訓練を終えて一段落したのかゆったりとしているオメガモンに、彰人の父親が尋ねた。

「精神と肉体的な修行を少々……」

「そうそう。きつかったけど、何かエネルギーが体中に満ち溢れているというかそんな感じがするよ」

小皿におかずを移しながら、ご飯と一緒に美味しく食べる彰人を見て、オメガモンは真剣な表情で彰人の両親に話した。

「実はこの前、彰人を狙いに来たデジモンがいましたが、私が倒しました。しかし、いつ来てもおかしくない状況なので、心しておいてください」

『…………… わかりました……………』

「！！ どうやら、お客さんだな」

インターホンが鳴ったことに気がついた彰人はすぐに玄関に出て、ドアを開けた。

「オメガモンの適合者デュナミストさんですか？」

「どちら様でしょうか？」

永島家の玄関にいたのは、ジルだった。

彰人は、ジルの雰囲気を感じ取り、自分の、オメガモンの敵だと認識した。

「少しお付き合い願います」

「すみませんが、少し待ってもらえませんか？」

そう言ってジルに少し待つように伝えたと、彰人はデジヴァイスを片手に持ちながら、リビングに向かった。

「どうした？」

「敵がわざわざ玄関までやって来た。どうやら、こちらと一戦交えるつもりだ」

彰人の行動に疑問を感じて尋ねてきたオメガモンに簡単に要件を伝え、オメガモンをデジヴァイスの中に戻すと、直ぐ様デジヴァイスをポケットの中に入れた。

「行つてきます」

「気を付けてね」

彰人は、両親に挨拶するとすぐにジルが待っている玄関まで全力で戻った。

「案内してもらおうか、戦場に」

「わかりました。それでは私の後ろを付いてきて下さい」

ジルに案内されて、彰人は神社の境内の中に入った。

「名前を名乗ってもらおう。僕はオメガモンのデユナミストの適合者、永島彰人だ」

「私はジル。デユナミストの適合者ではないけど、あるデジモンの操作主よ」

彰人とジルはお互いに自己紹介をすると、それまでの雰囲気を変らせて睨み合った。

「お前の仲間がデスモンを遣わしたのか？ 僕を殺すことを嫌がっていたデスモンを無理やり僕のところを遣わして、何とも思わないのか？」

彰人は、ジルと会ってから抱いていた疑問をジルに尋ねた。

彰人にとって、デスモンの一件は許せなかったことなのか彰人の表情は険しかった。

「別に何とも思っていないわ。私の他にもう一人女がいるんだけど、

そいつのパートナーデジモンがデスモンだったの。それで、あんたを殺しに向かったんだけどやられたのよね、これが。でも、あたしのパートナーデジモンがあんたとオメガモンを殺すわ。そうすれば、正樹からご褒美がもらえるの。覚悟なさい」

そう言うと、ジルはポケットの中からデジヴァイスを取り出した。そして、彰人に向かって突き出すと、声を上げた。

「ピエモン！！リアライズ 実体化！！」

ジルは、自分のデジヴァイスから、ピエロの仮面と姿を模った人型に背中に四本の剣を背負ったデジモン・ピエモンを召喚した。

「オメガモン！！リアライズ 実体化！！」

ジルの行動に合わせて、彰人も自分のデジヴァイスからオメガモンを召喚した。

「ふふふ…… 初めまして。オメガモンのデュナミスト適合者さん。私はピエモン。ジル様のパートナーデジモンです。以後お見知りおきを」

ピエモンは、敵であるはずの彰人に丁寧^{ニジヤウ}に自己紹介兼あいさつをしました。

「究極体！？ あれが……」

ピエモンの姿を見た彰人は再びデジヴァイスを服のポケットの中から取り出し、ピエモンに向けると、ピエモンの情報を調べ始めた。ピエモンの情報を知った彰人は目を見開くと、究極体の出す歴戦のオーラに圧倒されながらピエモンの姿を見つめた。

何故なら、ピエモンは究極体と呼ばれるデジタルワールドでの弱肉強食の生存競争に勝ち抜き、その肉体を極限の強さまで進化させた世代だからだ。

ピエモンは震えている彰人に顔を向けると、瞬時に彰人の目の前に移動し腹を殴り付ける。

「グハツ!!」

「彰人!!」

ピエモンの人間の目では追う事さえ到底不可能なスピードからの重い一撃を受けた彰人は、地面へと吹き飛ばされ、神社のこま犬の像の台座に激突し、地面に倒れた。

その様子にピエモンは笑みを浮かべると両手に電気の帯を生み出し、地面に倒れている彰人に振り下ろす。

「死になさい!! エンディングスナイプ!!」

「クツ!!」

ピエモンが放った電気の帯・エンディングスナイプが彰人に当たろうする。

しかし、その直前にオメガモンが高速で移動し、ピエモンの背後に現れると、左手のグレイソードをピエモンに向かって振り下ろす。

「私の適合者^{デユナミスト}に手を出した罪は重いぞ!! グレイソード!!!」

「むっ!!」

オメガモンがピエモンの背後に現れると、ピエモンは瞬時にエンディングスナイプを中断すると、背中に背負っていた四本の剣の内之二本を引き抜いて、オメガモンのグレイソードを受け止める。

「流石はロイヤルナイツ最強と謳われた聖騎士…… 私に気付かれずに此処まで接近するとは…… でも、剣先が鈍ってますね、やはりこの世界に来て、強いデジモンと戦っていないからでしょうか？」

「例えそうだとしても、お前に勝てない訳ではない！！」

オメガモンの攻撃にピエモンは感心しながら、何処か嘲笑うような声を上げるが、オメガモンは関係無いと言わんばかりにピエモンの言葉に反論するように叫ぶと、空中でピエモンに向かって右手のガルルキヤノンから砲撃を放つ。

「ガルルキヤノン！！」

「フン！」

オメガモンがガルルキヤノンを放ち、物凄い量のエネルギーが圧縮されたエネルギー弾がピエモンに直撃しようとした瞬間に、ピエモンの姿は突如として空気に溶け込んだかのように消失した。

それを見たオメガモンが思わず動きが止めて、ピエモンの姿を補足しようとしたが、オメガモンの背後にピエモンが姿を現し、オメガモンの背に向かって右回し蹴りを放つ。

「フツ！！」

「クツ！！」

しかし、ピエモンの右回し蹴りを間一髪で右手で受け止めたオメガモンは苦痛の声を上げながら、衝撃までは相殺できなかったのか、後ろに下がってしまった。

そして地上で起き上がろうとしている彰人に目を向け、二人の視線が一瞬交錯するとお互いに頷き合い、オメガモンは再びピエモンに向かって突撃しながら、ガールルキャノンからエネルギー弾をピエモンに向かって放つ。

「ガールルキャノン!!!」

「無駄な事を!!!」

オメガモンは空中でピエモンに向かってエネルギー弾を放つがピエモンに当たる直前で再びピエモンの姿は消失した。

そして先ほどと同じ様にオメガモンの背後に現れるが、その瞬間に、オメガモンはピエモンに向かって振り返り、ガールルキャノンから再度エネルギー弾を放った。

「ガールルキャノン!!!」

「なんと!?! グアアア!!!」

オメガモンの背後に現れたピエモンに向かって、ピエモンに向かって振り返ったオメガモンがピエモンに向かってガールルキャノンの砲撃を放ち、ピエモンに直撃させた。

それを確認したオメガモンは瞬時に煙が上がっている場所にガールルキャノンを向けると、再びガールルキャノンから砲撃を放つ。

「ガールルキャノン!!!」

「ガアアア！！！」

煙が吹き上がる場所に向かってオメガモンはガルルキャノンを放ち、ピエモンに再度直撃させた。

「頭に来ました……いくら温厚で優しい紳士である私でも今の攻撃で頭に来ました……もう許しません！！ ジル様！！ お願いします！！」

体の至る所にダメージの痕が目立つピエモンは頭に來たらしく、普段の冷静さをかなぐり捨てたような表情でジルにあることを頼んだ。

「いいわ！！ アルティメットエボリューション！！」

ジルの漆黒のデジヴァイスから光がピエモンに注がれると、ピエモンのダメージは癒えて、ピエモンの服が黒色に変わった。

「カオスピエモン！！」

「何！？」

まさか、ピエモンが進化出来るとは微塵も考えていなかった彰人は、驚愕した。

その一方でオメガモンはピエモンの言葉の意味について考えていた。

（どうやら、ジルという少女の他にデスモンのティマーの少女、そしてもう一人黒幕がいるな…… 彰人に何故執着するのは知らないが……）

「喰らいなさい！！ トイワンダネス！！！！」

カオスピエモンは、彰人に向かって両手を突き出すと、凄まじい威力の衝撃波を放った。

「私の適合者デュナミストに手は出させないぞ！！ 彰人、右に動け！！」

「わかった！！」

オメガモンは彰人の前に立つと、背中に羽織っているマントでトイワンダネスを防ぐと、彰人に自分とは反対に動くように指示を出した。

「人形におなりなさい！！クラウントリック！！」

カオスピエモンは、彰人に向けて白い布を放とうとする。

「そうはさせないぞ！！」

白い布を見たオメガモンは、白い布を放とうとするカオスピエモンに向かってガルルキャノンを放った。

「何！？ あーーーー！！！！ この布は特注品でとても高いのに！！！！ なんてことをしてくれるのですかオメガモン！！」

間一髪でガルルキャノンを避けたカオスピエモンは自分の買った（？）特注品の白い布がガルルキャノンによって無にされたことを知って嘆いた。

「それは良かったな！！ ガルルキャノン！！」

それを見たオメガモンは、ガルルキャノンを追撃とばかりにカオスピエモンに撃ち込んだ。

「グハア！！　こうなつたら究極奥義です！！　マスクド・スクエア 仮面舞踏会！！」

カオスピエモンは右手に凄まじい暗黒の力が籠ったエネルギーを発生させると、天に向かって右手を掲げた。

すると、暗黒のエネルギーが彰人とオメガモンを含めた辺りを飲み込み、ジルとカオスピエモン、彰人とオメガモンはその場から消えた。

「何だここは！？」

「カオスピエモンの思い通りになる世界だ」

ジルとカオスピエモン、彰人とオメガモンはピエモンの思うが儘となる世界 マスクド・スクエア 仮面舞踏会に移動した。

仮面舞踏会は、白亜の空間で、ありとあらゆる場所にピエモンの仮面が浮いている不気味な空間だった。

「随分と悪趣味な空間だな……　これなら、何も無い方がいいよ……」

……

「悪いけど……　悪趣味という言葉だけは聞き捨てならないわね……」

彰人の呟きが聞こえてしまったのか、ジルは少し怒りながら彰人に言葉を返した。

「彰人！！　上だ！！」

「うおっ!?!」

オメガモンはカオスピエモンの気配に気付くと、直ぐ様顔を上に向けた。

それに反応し、彰人も顔を上げると、そこには無傷のカオスピエモンが浮遊していた。

「そんな!?!無傷だと!?!」

彰人は無傷のカオスピエモンを見て愕然とした声を上げた。

「フフフフフツ、ここは私の世界です。私の思い描いた通りの事が実現する世界です。もう、貴方方が勝つ可能性は万に一つも有りませんよ!?!」

「やってみなければわかるまい!! ガルルキャノン!!」

オメガモンのガルルキャノンがカオスピエモンに迫るが、カオスピエモンは余裕の笑みを浮かべたままだった。

「さて、どうなると思います?」

「何!?!」

「嘘でしょ!?!」

そして、次の瞬間に、オメガモンと彰人は愕然とした。

なんと、オメガモンのガルルキャノンはカオスピエモンに当たる事無く、カオスピエモンの目の前に停止していたのだ。

「言ったでしょう？このマスクド・スクエア仮面舞踏会は私の世界。私の思うが儘の世界だと！！」

「ば、馬鹿な…」

その言葉に、彰人はようやくカオスピエモンの言葉が理解出来たのか、あまりの凄さに恐怖の色を浮かべながら愕然としてしまった。

「さてさて、それでは最終幕を始めましょうか……この殺戮ショーの最終幕をね！！！！」

カオスピエモンは壮絶な笑みを浮かべながら言うと、両手を彰人とオメガモンに向かって突き出した。

「何！？」

「ぐお！？」

彰人とオメガモンの体が、突如空中にまるで碟の様に両腕を伸ばした状態で固定されてしまったではないか。

「たっぷり可愛がってから殺してあげますからね？」

カオスピエモンは狂気に満ちた眼差しで彰人とオメガモンを見た。

「この変態紳士！！ どれだけ悪趣味してんだこの野郎！！」

普段はあまり怒ることは無い彰人は、日頃の怒りを爆発させるよ

うにカオスピエモンの行いを非難した。

「なっ！？ へっ、変態ですと！？ ちっ、違いますよ！！ 私は変態ではありません！！ もし、仮に変態だとしても変態という名前の紳士ですからね！！」

思わぬ彰人の言葉のカウンターパンチにカオスピエモンは彰人の剣幕にタジタジになりながらも、自分が変態であることを必死で否定したが、上手く出来なかったようだ。

（結局、自分が変態であることは否定しないのね……）

（こんなデジモンで大丈夫なのか？）

（大丈夫……ではないわね。こいつ、私の着替えやお風呂とか普通に覗いているのよ。おかげで嫌になるわ……それさえなければいいデジモンなのに……）

（大変なんだな…… 色々……）

オメガモンとジルは念話でピエモンの普段の変態ぶりを話していた。

「コホン。さあ！！絶望の時間ですよ！！ ですが、簡単には殺しませんよ。たっぷりと！！たっぷりと苦しんで頂きますよ！！」

そして、ピエモンが右手を高らかに上げた瞬間に、彰人とオメガモンの体の急所をわざと外し、体の至る所にトランプソードが突き刺さった。

その瞬間に、彰人とオメガモンは苦痛の声を上げた。

「グハア!!」

「グアアアアアアア!!」

やはり、デジモンと人間の違いからかオメガモンよりも大きな苦痛の声を彰人は上げた。

「おやおや、人間とは随分と脆いものですね。でも、大丈夫ですよ。私を変態呼ばりした分もこめて遊んでますからね」

愉悦の笑みを浮かべながら、カオスピエモンは愛撫するかのような手付きで彰人の頬を撫でた。

「気安く触るんじゃねえ……。ピエロは黙ってサーカスでショーをやっている!!」

全身から感じられる苦痛に耐えながら、彰人はカオスピエモンに罵声を浴びせる。

「ふふふ…… マスクド・スクエア この仮面舞踏会自体が私のサーカスなのですよ」

「そうか。だとすると、随分と悪趣味なサーカスだな。人來ないぞ?」

『悪趣味だけは言うな（言わないで下さい）!!』

彰人が苦痛に苦しみながらも浮かべた笑みと共に発した言葉にカオスピエモンとジルは同時に突っ込みを入れる。

「ふふふ…… それなら貴方に地獄を見せてあげましょう……」

カオスピエモンは背中に在るマジックボックスに突き立っている四本の剣を引き抜くと、四本の剣をテレポートさせる。

「トランプソード……!」

「ガハッ……!」

「オメガモン……!」

四本の剣に胸を串刺しにされたオメガモンは苦痛の声を上げると顔を俯けて、瞳を閉じてしまった。

「オメガモン……! しっかりしろ……!」

彰人は自分の隣で俯いているオメガモンの名を叫んでいると、彰人の目の前に降りて来たカオスピエモンがゆっくりと近付きながら、再びトランプソードを出現させ始める。

「さあ、もう少しで止めを刺しますが、何か言い残すことは？」

「……悪いが死ぬ気なんて毛頭無いね。オメガモンと共にお前を倒す。そして、大切な人達を護ってみせる……!」

それを見た彰人は、険しい表情をしながらカオスピエモンを睨みつけながら、話すと、ピエモンは面白そうな表情を彰人に向ける。

「ほお、その状態でよく言えますね」

「例え、体が動かなくてもお前を倒すことは出来る！！ 僕はオメガモンの適合者^{デユナミスト}なのだから！！ 僕は戦う！！ これ以上オメガモンだけを戦わせやしない！！ オメガモンが背負っている悲しみや憎しみ、怒り……全てを背負う！！！！」

彰人が宣言した瞬間、彰人の服のポケットの中に入っているデジヴァイスが光り輝き、彰人とオメガモンの拘束を外し、^{マスクド・スクエア}仮面舞踏会が解除され、辺りは元の場所に戻った。

「そんな馬鹿な！？」

「嘘でしょう！？」

自身の思い通りになるはずの^{マスクド・スクエア}仮面舞踏会が破られたことにカオスピエモンとジルは驚愕した。

「彰人、一緒に戦おう！！ 私たちが手を組めば何者にも負けはしない！！」

「オメガモン…… 怪我は大丈夫なのか？」

「問題ない。さあ、行くぞ。彰人の大切な物を、大切な世界を守るため！！」

彰人とオメガモンの思いが共鳴した瞬間、彰人が持っていたデジヴァイスが光り輝き、彰人とオメガモンを包み込む光の柱が出現した。

そして、彰人は持っていたデジヴァイスを胸に当てて、自身の体をデータ化しながら、デジヴァイスの画面に書かれている文字を叫

ぶ。

《ULTIMATE - EVOLUTION》

「アルティメットエボリューション!!!」

彰人が叫ぶと同時にデジヴァイスから音声が響き、彰人とオメガモンの体が一つに成り巨大な虹色のデジコードの繭が出現した。

そして、繭が自然に消滅すると、中から背中に内側が赤色で外側が白色のマントを羽織って、右肩には蒼色のアーマーをつけ、右手が蒼色の機械狼 メタルガルモンの頭部を模した籠手をしていて、左肩には内側が黄金で外側が赤色の盾 ブレイブシールド をつけ、左手が黄金の竜人 ウォーグレイモンの頭部を模した籠手をした聖騎士 オメガモンが両手を顔の前で交差させながら、姿を現した。

「オメガモン!!!」

オメガモンは顔の前で交差していた両手を力強く振り下ろして、顔を上げると、瞑らな空色の瞳を出現させた。

「これが“最後の適合者”^{デュナミスト}の力……」

「デジモンと人間が融合した!? これが適合者^{デュナミスト}の力なのか……」

ジルとカオスピエモンはオメガモンの威厳とオーラに圧倒されながら、驚愕に目を見開きながら声を上げた。

「違うな。これは、僕とオメガモンの絆の力だ!! ガルルキャノン!!!」

だからこそ、オメガモンはカオスピエモンの変幻自在なマジックを封じつつ、一気に攻めきって勝つつもりなのだ。

そして煙の中から怒りに満ちた表情をしたカオスピエモンが姿を現し、四本のトランプソードを背中から抜き取り、オメガモンに向かって構え出す。

「許さんぞ！！ これでも喰らえ！！トランプ……」

「クッ！！」

カオスピエモンがトランプソードを放とうとしている事に気が付いたオメガモンはその場を移動しようとする。

「なーんてね。ガルルキャノン！！」

しかし、その直前に、オメガモンはガルルキャノンを地面に向かって撃つことで、爆煙を発生させると、自分の姿を隠した。

「何！？ どつ、何処へ！？ ジル！！」

それを見たカオスピエモンは、まっ先に自分の操作主テイマーの身を案じた。

「お前、頭悪いな。真剣勝負にそういう姑息な手を私が使うんでも思ってたか？」

オメガモンの声は何処かから響くと、左手に炎を纏ったグレイソードを射出させたオメガモンがカオスピエモンの正面に現れて、全力でグレイソードをカオスピエモンの胸に向かって振り下ろした。

「オメガモン…… ピエモンを倒していい気になれるのも今のうちよ…… 正樹のデジモンがお前を滅ぼすんだから!!」

「いつでも相手になってやる、と正樹に伝えておいてくれ。私はそう簡単に負けはしないぞ」

ジルは、オメガモンに言葉を残すと、神社から去っていった。

ジルがいなくなった後、オメガモンは体から虹色のデジコードを発生させると、彰人に戻った。

「くっ!!」

彰人は戦闘の疲労からか思わず片膝を付いてしまった。

「これが戦いか…… 辛いし、苦しい…… オメガモンはこれに毎日耐えて生きていたのか…… これは普通の人間なら耐えられなくなってもおかしくはないよ…… だから、そのための適合者か……」

彰人は、息を乱しながらも戦いの辛さ、苦しさに苛まれながらも適合者の必要性についてデジヴァイスを見ながら考えた。

「帰らなきゃ…… 親が心配している…… 僕には帰るところがあるんだ……」

彰人は、デジヴァイスをポケットに戻しながら全身に力をこめて立ち上がるつもりだったが、体が思うように言うことを聞いてくれず、地面に倒れ込んでしまった。

「くそ…… これなら訓練を10倍に増やすようにオメガモンに言えばよかったな……」

全身を襲う激痛と疲労についに耐え切れなくなった彰人は、瞳を閉じて、眠りに落ちた。

「彼が“最後の適合者”……」

それを一人のゴスロリの服を着ている少女が見ているとは知らずに

……

第3話 適合者の訓練と実戦（後書き）

デジモン紹介

ピエモン

世代／究極体 属性／ウィルス種 種族／魔人型
必殺技／トランプソード

奇抜な姿と神出鬼没な、全てが謎に包まれた魔人型デジモン。魔人型のデジモンは謎の部分が多く、悪魔系や、アンデット系とはまったく別次元的な存在で、正体はまったくの不明である。何の為に出現したのか、その存在目的も不明であり、それを解明する手段も現時点では無い。実力に置いてはトップクラスであり、ピエモンに出会ったら逃げるとさえ言われるほどである。背中“マジックボックス”から、ハート、スペード、ダイヤ、クラブの4本の剣で戦う。もし彼に出会ってしまった場合、もはや己の運命を呪うしかない。必殺技の『トランプソード』は、背中の4本の剣、全てを瞬時にテレポートさせて、相手に回避不能の攻撃を放つ技だ。その他にもマジック染みた技を多数所持しているぞ。

カオスピエモン

世代／究極体 属性／ウィルス種 種族／魔人型
必殺技／トランプソード

『デジモンワールド2』に登場。カオスロードの手下であることとカオス3将軍の1体であること以外は全くわからない。必殺技は背中の4本の剣を瞬時にテレポートさせて攻撃する『トランプソード』だ。

次回予告

オメガモンの適合者デユナミストに正式になった彰人。
しかし、切原正樹のパートナーデジモンが牙を剥くとき、とある現実世界での因縁の戦いが再現されることに!!!
果たして彰人は、勝ち目の少ない、その時よりも遥かに条件の悪い戦いにどのように挑むのか？

次回、世界を越える終焉の聖騎士物語

ディアボロモンの来襲

聖なる騎士出陣！ 世界を守る為に宿命の戦いへ再び舞い戻る！
(2001年東映アニメフェア限定デジタルモンスターカードゲームから出典しました。)

第4話 デイアボロモンの来襲 前編（前書き）

今回の話は、以前から書きたかった『デイアボロモンの逆襲』をベ
ースにして書きました。

今回は長いので、前後編もしくは前中後編になります。

p・s 9/5 オメガモンが無数のクラモンの恐怖を理解したの
に、戦うのは如何なものかと想い、変更しました。

クラモンとの会話を話の展開上、削除しました。

申し訳ございませんでした。

第4話 デイアポロモンの来襲 前編

それは彰人とオメガモンが出会う前のとある世界で起きた出来事と関係していた。

彰人の世界とは別の現実世界^{リアルワールド}で、世界を滅ぼす力を持った悪魔のようなデジモンーデイアポロモンと、勇気と友情、そして人々の想いが一つになった時に現れた聖騎士デジモンーオメガモンの戦いがネット世界で繰り広げられた。

オメガモンは人々の想いを自身の力に変えて、デイアポロモンを撃ち破り、世界を救った。

しかし、デイアポロモンは狡猾にも生き残り、オメガモンを滅ぼす為に再び動き出し、オメガモンを打ち破ることに成功した。

ところが、オメガモンの思いを引き継いだ竜人型デジモンーインペリアルドラモンによって、デイアポロモンは今度こそ本当に根絶された……はずだった。

ところが、インペリアルドラモン パラディンモードによって初期化されて、根絶されたはずのクラモンがどういうわけか別の世界の住人、切原正樹のパソコンから出現し、正樹が操作主^{テイマー}になったのだ。

それを知ったイグドラシルは、その世界を守るために一度死んだオメガモンをデジメモリ^{デユナミスト}にしてその世界に送り込んだ。

そして、オメガモンを適合者と一体化することで更なる力を引き出せるようにしたのだ。

その世界に送り込まれたオメガモンは、自分と同じくぬぐい去れない過去を持ちながら、前に進み始めていた永島彰人を自分の適合者^{デユナミスト}に選び、正樹の仲間であるジルと青山さくらとの戦いを乗り越えていった。

オメガモンの適合者^{デユナミスト}である彰人とオメガモンが一体化してピエモンを打ち破った日から2週間後、オメガモンとディアボロモンの因縁の対決の幕が切つて下ろされることになった。

彰人ことオメガモンが住んでいる世界で、かつオメガモンが生まれたいくつにも分かれた世界の0番目のデジタルワールド（デジタルワールドの基本世界）と隣接している世界。

その場所のお台場に存在しているビルの上で、黒い髪に赤い瞳をした、彰人と同じく適合者^{デユナミスト}である美女、工藤優衣は静かに立ち続け、街を眺めていた。

ディアボロモンのことをチンロンモンから聞いたイグドラシルは、オメガモンのことを案じて、適合者^{デユナミスト}の中で唯一手が空いている位置にいる優衣に連絡をしてオメガモンを助けるように頼んだのだ。

「やはり、アーマゲモンで勝負するつもりね…… チンロンモンから聞いた通り、オメガモンだけでは勝ち目が無いのは本当だね…… その操作主は賢いのか臆病なのか紙一重ね……」

優衣は、チンロンモンから聞いたアーマゲモンの強さに驚いた。何しろ、防御面では、オメガモンが何発ガールキャノンを撃ち込んでも、インペリアルドラモンが必殺の一撃を打ち込んでも、全く通用しないほどの頑丈さを誇っているのだ。

攻撃面では、一発か二発の攻撃でオメガモンとインペリアルドラモンをほぼ戦闘不能に追い込む凄まじい攻撃力を発揮したのだ。果たして、自分では勝てるのか。優衣も一瞬そう考えるほどだった。

「私が参戦してもいいけど、それだとオメガモンの立場が無いわね

……
アーマゲモンとの戦いだけ、私が参戦させてもらいましょうか。それよりも、まずはオメガモンの適合者さんデユナミストを探さないといけないわね」

優衣は、ビルから降りて街中を歩きながら、静かに街の中の機械関係から出て来る幼年期デジモンを険しい瞳で見つめた。

そして、オメガモンの適合者デユナミストである彰人を探し始めた。

東京の街中。

その場所に存在している道を、彰人が自宅に向かって急いで走っていた。

オメガモンと一体化した影響から、髪の色が黒色から銀色、瞳の色も黒色から空色へと変色している。

突然、東京の街中の機械関係から溢れるように姿を現した同じ種類の幼年期デジモンを彰人は十分過ぎるほどに知っていた。

その事態の原因となっているデジモンと戦う為に、彰人は急いで自宅に向かっていた。

しかし、彰人が走っている道路の先から、何処か普通の人間とは違う雰囲気を放っている黒髪に赤い瞳をして、ロングスカートを履いている女性が歩いて来る。

「何者だ!？」

その女性の姿を見た瞬間、彰人は何かを感じたのか女性を険しい視線を睨みつけながら、言葉をかけた。

「初めまして、オメガモンの適合者デユナミストさん。私は貴方と同じ適合者デユナミストの工藤優衣よ。よろしく」

その彰人の視線に女性 工藤優衣は気がついたのか、困ったような笑みを僅かに口元に浮かべながら彰人に声を掛ける。

「悪いが、僕のことを知っていいのは、敵であるデジモンだけだ。お前のデジモンは何だ？」

「私は貴方と戦うつもりはないわ。もし、戦えば私は5秒で負ける。しかし、これから貴方が戦う敵は強大で狡猾で、貴方に勝ち目は少ない。それでも貴方は立ち向かうと言うの？」

これから起きている事を知っているような優衣の言葉に彰人は驚きながらも、冷静に受け答えをした。

「僕は戦う。例え、勝ち目が少なくても僕に出来ることがあるはずだ」

彰人は優衣の目をしっかりと見ながら、答えた。

「そう。それならもし、私がネット世界へのゲートを開けることが出来るとしたら貴方はどうする？」

「……先ほどはすまなかった。ぜひ、協力を願いたい」

「はい」

彰人は優衣と共にすぐに自宅へ向かっていった。その時は、彰人は優衣の正体など知る由はなかった。

そして三十分後、彰人は来る途中で出会った優衣と共に、自室に集まったデジモン好きな連中と彰人の友人たちとそのデジモンに対する対策を取る為に話していた。

「皆も既にわかってはいるとは思いますが、今回の犯人はディアポロモンだ」

彰人は、全員の間を見ながら断言した。

「お前が以前倒したピエモンのパートナーの奴が言っていた正樹のデジモンがディアポロモンだな…… 全く最悪だぜ」

彰人の高校の同級生の藤城拓海が腕組みをしながら、彰人をお見舞いに行った際に聞いた話を思い出しながら、呟いた。

「俺は映像でしか見たことがないからよくわからないけど、そのディアポロモンって奴は確か核ミサイルまで発射した奴だよな。現実世界に出て来たら、何を仕出かすか分からないな」

同じく彰人の高校の同級生の村田将吾が『僕らのウォーゲーム！』を思い出しながら、話した。

「そうです。皆さんの言う『ディアポロモンの逆襲』で初期化されたクラモンがこの世界の切原正樹の元に来ました。更に、ディアポロモンはメールと共にクラモンを現実世界に送り込んでいます」

その女性 優衣は全員に状況を伝えると共にノートパソコンの画面を全員に見えるように回すと、自分のノートパソコンを弄ると件のメールと思われるメールを開いて、クラゲのような姿をして一つ

目を持ったデジモン・クラモンがパソコンに映し出した。

「確認で聞くけど、それ…… 大丈夫よね？」

ノートパソコンに映し出されたクラモンの映像に伊藤詩織はおっかなびつくりな声を上げながら、クラモンの画像を指差した。無理もない話である。

何故なら、画像からクラモンが現れると言う事は、優衣が映し出した画像からもクラモンが現れると言う事に他ならないからだ。その事はもちろん優衣も分かっている。

「はい、これはキャプチャーした映像ですから大丈夫ですよ」

優衣は笑顔で詩織の質問に答えると共に、画像をパソコン内部のゴミ箱の中に移動させて、消去した。

その事に全員が安堵の息を吐くと、美藤達也と叢雲龍平が口々に声を出す。

「でも、今こうしている内にもクラモンは増殖し続けている」

「やがては世界中がクラモンパンデミックになってもおかしくはないな」

美藤達也と叢雲龍平の言葉に全員が世界に迫っている危機を十分に理解すると、彰人は、優衣に真剣な表情を向けながら、頼み事をした。

「優衣さん。ネットの中にゲートを開いて下さい。何処かにクラモンをばら撒いているディアボロモンがいるはずですよ。そいつを叩いて返す刀でアーマゲモンを倒す！！」

彰人は声を出すと共に手を打ち合わせた。

クラモンをばら撒いている元凶である本体のディアポロモンを倒せば、少なくともこれ以上のクラモンの現実世界侵入が治まる。

そう考えた彰人は、クラモンを生み出しているマザーであるディアポロモンを倒そうとネット世界に入り込もうとする。

「確かにいい考えだが、お前死ぬ気か？」

達也が美形の顔を向けながら、彰人に話し始める。

明らかにこの流れは、『ディアポロモンの逆襲』と一緒に達也は不安がこみ上げたのだ。

最悪の場合、彰人が死ぬかもしれないと考えたのだ。

「オメガモンと一体化したとはいえ、お前はあのオメガモンには程遠い。その上、アーマゲモンの戦闘力ははっきり言って異常だ。デジモンの中でもあいつとまともに戦えるのは少ないのに、無茶は程々にしておけ」

達也の言う通りだった。

普段の彰人ならここで引き下がるが、今の彰人は引き下がらない。

「わかっているよ。でも、あいつと戦えるのは僕しかない。例え、勝ち目が無くても。それに、勝ち目なんか、戦いの中でも見いだせるだろう？」

彰人は不敵に笑った。

相手は、オメガモンのジヨグレス進化前のウォーグレイモンとメタルガルルモンの二体がかかりでも倒せなかった存在であるディアポロモン。

そして、オメガモンとインペリアルドラモンでも歯が立たず、初期化という手段を使ってようやく倒せた、正攻法が効かないアーマゲモン。

オメガモンと一体化したことでデジモンの闘争本能までも引き継いだのか、彰人は楽しそうな笑みを浮かべている。

「わかった。俺たちは応援しか出来ないけど、お前が勝つと信じる。負けるなよ」

達也は、そんな彰人を見て苦笑しながらも言葉を発した。

達也は、こうなった時の彰人は誰にも止めることは出来ないことを十分に知っていた。

「そうです。此処はオメガモンに任せるべきです。永島さん、私がメールの発信元に誘導します。皆さんは、デジヴァイスの代わりに携帯電話を使ってクラモンを回収してください。捕まえたクラモンは、私のパソコンに転送させて下さい」

優衣はパソコンを操作しながら、これからの方針を全員に伝えた。その後、全員は自分たちの仕事を果たすべく動き始めた。

「こつちの方でクラモンを見たっておじさんが教えてくれたぜ。早く回収しよう」

「ああ、そうらしいな。とにかく一体でも多くのクラモンを優衣さんの下に送ろう。優衣さんの話だと更に多くのクラモンが出て来ているそうだからな。クラゲだらけの世界って誰得だよ……」

達也と龍平は、早速クラモンの回収に取り組んでいるが、なかなか上手くいかない。

クラモンは見た目が可愛いので、子供たちへの説得に時間がかかっているのだ。

「なあ、この事件をさ、俺たちよりも小さい子供たちが解決したんだろう？ それって凄すぎじゃない？」

「だよな〜 俺たちは映像で見ただけだこーだ言っているけど、実際やってみると半端なくきついわ〜 本当に凄いよ、選ばれし子供たちって」

「でも、俺たちも負けてられないな、もし選ばれし子供たちが見ていたら、笑われるぜ」

「そつだな。よし、行くぞ！！」

達也と龍平は、選ばれし子供たちのことを褒めながら、クラモンの回収を急いだ。

彰人は、優衣によってゲートが開かれたパソコンの前に立つと、デジヴァイスをゲートに向けてパソコンから発生された強い光と共に彰人の姿は消えていった。

彰人は、強烈な光に咄嗟に目を閉じたが、瞬間で全体を包んだ不思議な浮遊感に目を開けて辺りを見ると、自分が巨大なチューブのような物の中、ネット空間内部に存在する通路にいることに気がついた。

しかも、自分はかなりスピードで飛行しているにも気がついた。

(ここがネットの世界か…… 何だか想像していたものと違うな……)

彰人は辺りを物珍しそうに見渡しながら、前に進む。

その場所にも大量のクラモンが存在し、通路内部を通過して現実世界に出ようとしていた。

そのクラモン達とは反対に彰人は、クラモン達が出て来る方向に向かって真っ直ぐ進んでいた。

「ん！？ ブルアアアアアア……！！！」

前方から進んで来たクラモンと激突した彰人は、Vの形をしていて、メロンが好きな魔物の声を出しながら、後ろに下がったが、直ぐ様前に戻った。

(勝負だ！！ 切原正樹！！ お前の狙いはわからないが、お前のやったことは許すことのできないものだ！！)

彰人は、前方を険しい顔して見つめながら、自身のデジヴァイスを握る。

「それでは…… 行きましょうか！！！」

彰人が気合を込めて叫ぶと、自分のデジヴァイスを光り輝かすと、自身の胸元にデジヴァイスを当てて自身の体をデータ化させながら叫ぶ。

《ULTIMATE - EVOLUTION》

「アルティメットエヴォリューション!!!!」

デジヴァイスから電子音声が響くと共に、彰人の体から虹色のデジコードが飛び出し、繭を形成し始めると、その繭は光の速度で前へと進み、光が通路内部に満ちる。

「オメガモン!!!!」

そして光が消えて、虹色のデジコードが弾け飛ぶと同時に中から、オメガモンが姿を現す。

究極進化を終えて、遂にその姿を現したオメガモンは通路の先に見える広い電子空間に飛び出す。

そして、オメガモンは飛び出した空間を見回してみると、無数のクラモン達と黒い球体の中に潜んでいるオレンジ色の髪を持ち、胸に砲塔と思われる箇所を備え、間接が存在しない長い腕を持った悪魔のようなデジモン・ディアポロモンの姿を目にした。

(!?!? これは…… 考えたな……)

余りにも多すぎる数え切れないほどのクラモンの数を見ても、オメガモンは冷静だった。

しかし、幾らなんでもクラモンの数が多過ぎるのだ。

何故なら、オメガモンがいる空間には視界が封じられるほどの数のクラモンがいるのだ。

その数は最早数えるだけでも一苦労の領域だ。

しかし、オメガモンは慌てる事無く、自身に向かって寄り集まって来ているクラモンに目を向けながら左腕を掲げて、デジモン文字で『オールデリート』と刻まれた大剣 グレイソードを射出する。

「ウオオオオオオオー！！！！！！」

オメガモンはグレイソードを射出すると同時に、全力で横薙ぎに振るうことで、視界を塞ぐほど存在しているクラモン達を吹き飛ばす。

しかし、すぐに吹き飛ばされた以上のクラモン達がオメガモンの周りに寄り集まる。

(それにしても、この数のクラモンをよく作れたな……)

オメガモンはディアボロモンとクラモンの特性を恐ろしく思いながら、今度は右腕を軽く振ると、メタルガルルモンを模した籠手の口部分から巨大な大砲 ガルルキャノンを展開して、黒い球体の中でオメガモンの動きを観察しているディアボロモンに照準を合わせると、砲撃を撃ち込む。

「ガルルキャノン！！」

『クラクラクラクラ~~~~！！！！！！』

オメガモンのガルルキャノンから撃ち出された砲撃がディアボロモンに向かって進む途中で、無数のクラモン達が砲弾の前に盾のように立ち塞がり、砲撃はクラモン達に直撃し爆発を起こした。

しかも、本来の目標だったディアボロモンには砲撃の余波さえも届く事が無く、ディアボロモンはオメガモンに嘲りに満ちた笑みを向ける。

(成程……あの時の再現ということだな……)

オメガモンはニヤリツ、と笑うと、空間に無数いるクラモン達と自分に向かって嘲りの笑みを浮かべ続けているディアボロモンを見た。

もし、オメガモンのガルルキヤノンが直撃したならば、ディアボロモンに大ダメージ、どころか致命傷を与える事は確実だった。ディアボロモンの防御力の低さを差し引いたとしても、の話があったとしても、オメガモンの攻撃力は凄まじいのだ。

しかし、ディアボロモンの周りを囲んでいる無数のクラモン達によつて、オメガモンの攻撃が届かないのだ。

流石に、幼年期のクラモンでは超越体であるオメガモンの必殺技であるガルルキヤノンを防ぐ事など不可能に近い話だ。

だが、ネット空間にいるクラモン達の数は最低でも十万以上を超えているのだ。

もし、例えオメガモンがガルルキヤノンからの砲撃を連射してクラモン達を排除したとしても、クラモンにはディアボロモンと同じく自身のコピーを病原菌のように無数に増やせると言う最悪な特性を持っている。

そのため、オメガモンがクラモンを倒す　クラモンが増える　逆戻りどころかより状況が悪くなる、の無限ループに陥ってしまう。

つまり、オメガモンの凄まじい威力を持ったガルルキヤノンの砲撃を持ってしても、全てのクラモンを消滅させることは不可能に近い事実なのだ。

その上、ディアボロモンとオメガモンと今戦っているフィールドの広さは異常と言っていいほどの大きさだ。

もし、これが狭い場所ならば砲撃の余波で数多くのクラモン達の巻き込む事が出来るが、広すぎる場所では、砲撃の余波からクラモン達は逃れる事が出来る。

完全に今戦っている場所はオメガモンにとっては不利なフィールド

であり、ディアボロモンにとっては有利のフィールドなのだ。なので、このままオメガモンがディアボロモンに攻撃をしても、その度にクラモン達によって、オメガモンの攻撃を防いでいく。そうなれば、幾ら最強の聖騎士であるオメガモンでも体力を失ってしまい、疲弊した所を襲われディアボロモンに倒されてしまうのが目に見えている。

それでも、オメガモンはこの状況に絶望を抱かず、むしろ楽しそうな表情をしながら、この状況を打開するべく作戦を考え始めていった。

現実世界渋谷区。

その場所で達也と龍平はビルの壁に置かれている巨大テレビに映し出されているオメガモンとディアボロモンの戦いを見ていた。

ディアボロモンと切原正樹は自身がオメガモンを倒す映像を多くの者に見せる為に、戦いの映像を流していたのだ。

誰が如何見ても戦いの状況はオメガモンの方が不利だと達也達には分かっていた。

やはり全てはディアボロモンと切原正樹の策略だったと悔しげに顔を歪めていると、達也の持っている携帯から電話の着信音が鳴り響く。

「ん？誰だろう？　こんな時に……　はい、達也です」

『達也君！オメガモンのことよりもクラモン達をお願いします！！
厄介なのはクラモン達の方です！』

優衣からの連絡を聞いて、携帯を切った達也は、龍平に声を掛け

る。

「優衣さんから連絡があった！！ クラモンの回収続行だ！！」

「わかった！！」

達也と龍平は、直ぐ様クラモンの回収を再度始めた。

ネット世界のディアボロモンとオメガモンが戦っている電子空間。そこでは、ある一つの大きな変化が見られていた。

オメガモンがこの状況を打開するべく、ある作戦を実施しようとしているからである。

（これで絶対にディアボロモンを仕留める！！ それ以外のことは一切考えない！！）

オメガモンは覚悟を決めると同時にグレイソードの剣先をディアボロモンに向けると共に、ガルルキャノンの砲身を後方に構えた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！ ダッシユグレイソー
ーード！！！！」

ディアボロモンと睨み合いを行っていたオメガモンが後方へと集束したガルルキャノンを撃ち出しながら、その反動を凄まじい勢いに変えてディアボロモンに向かって突進する。

「グオオオオッ！ カタストロフィーカノン！！」

自分に向かって凄まじい勢いで接近して来るオメガモンに気がついたディアボロモンは折角上手くいつている作戦を邪魔されまいと、オメガモンに向かって胸元の発射口からエネルギー弾・カタストロフィーカノンを連続で撃ち込んで行く。

「そう来ると思っていたよ!! オメガカウンター!!!」

ディアボロモンの行動を見て、自信満々の笑みを浮かべたオメガモンは、グレイソードを装備している左腕を身体ごと大きく振りかぶり、カタストロフィーカノンの着弾の瞬間に、グレイソードを思いきり薙ぎ払うことでカタストロフィーカノンをディアボロモンへと跳ね返した。

剣や槍といった武器で相手の攻撃を止めることは簡単なので、誰にでも出来るだろう。

しかし、相手の攻撃を自分の思い通りの場所へと跳ね返すには多少の技術が必要になって来るが、決して不可能なんかではない。

「グアアアアアアアアアアッ!!!」

カタストロフィーカノンは強力なエネルギーの矢となり、ディアボロモンが隠れていた黒い球体を破壊した。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!! グレイソード!!!」

オメガモンは凄まじい勢いを維持したまま、クラモン達の壁に突撃すると、クラモン達の壁を破壊しながら、グレイソードに凄まじい炎を纏わせると、ディアボロモンに向かって振り下ろした。

「グハッ!!!」

オメガモンは暗くなった広い空間の壁を調べていた。

幾らディアボロモンを倒すことには成功したとはいえ、現実世界には既に逃げ出した大量のクラモン達が存在している。

そのクラモン達が何かをしない筈はないのだから、オメガモンは少しでも早く自分達の力で現実世界に出られるゲートを作れないのか調べていたのだ。

(……駄目だ……完全に閉じられたこの空間から出る為には、かなりの力を使わないと無理だ…… アーマゲモンの実力がディアボロモン以上だから、正直、力は出来るだけ消耗したくはない。これもディアボロモンの策の一つだったんだろう…… 完全に相手のペースで、原作通りだ…… 情けない話だよ)

オメガモンは確かにゲートを作ることができるとは、そのためにはかなりのエネルギーを消耗しなければならない。

オメガモンを倒す為にダミーのディアボロモンを潜ませただけではなく、無数のクラモン達と言う更なる策まで用意していたのだから、ディアボロモンと正樹の策には本当に底が知れない。

もし、オメガモンがかなりのエネルギーを消耗してゲートを作った現実世界に戻ったとして、いざアーマゲモンとの戦闘になれば、力を消耗したオメガモンではすぐに敗れてしまう可能性が高い。

オメガモンがどうしたものかと悩んでいると、オメガモンの背後に存在していた壁から光が溢れ、外へと続く通路が姿を現した。

「優衣さんが開いたのか？」

突然に何の前触れも無く開いた通路にオメガモンは目を見開くが、

畏と言う感じは見せる事無く明るい光に照らされている通路だけが静かに存在していた。

その通路にオメガモンは一応警戒しながらも足を進めるが、やはり何処にも変な所は存在せず、ただ真っ直ぐな道だけが先に伸びていた。

「よし、それでは行きますか!!」

オメガモンは背中のマントをたなびかせながら通路内部を駆け抜け、現実世界へと戻って行く。

ネット空間内部の通路。

オメガモンは、アーマゲモンとの戦いに、切原正樹との戦いに決着をつけるべく全速力で通路内部を進みながら、現実世界に戻っている。

「オメガモン!!」

「ムッ！優衣さんか？」

突然、聞こえて来た声にオメガモンが顔を上げて通路の上方に存在していたモニターに顔を向けてみると、現実世界でクラモンの処理を行っていた優衣の姿がモニターに映し出された。

「すまない、私が尽く相手の思う通りになってしまっ……」

「大丈夫よ。あの空間のゲートを開くことなど朝飯前だから。一つ報告があるわ。やはり、私たちの知っていた通りに現実世界にいた

クラモン達は東京湾の方に移動を開始したわ。しかも、更にクラモン達の数は増加中よ」

済まなそうに顔を俯げるオメガモンに、優衣はクラモン達の状況を知らせた。

「やはりな……是非も無し、というところか。わかった、私もすぐに向かう！！ 相手はあのオメガモンとインペリアルドラモンでも歯が立たなかったアーマゲモン！！ 今からわくわくするぞ！！」

オメガモンは優衣の報告の内容を聞いても、寧ろ楽しそうに話した。

例え相手が自分よりも強くても、彰人ことオメガモンは恐れず立ち向かう勇氣を持っているからだ。

『いいの？そうになると私たちが知っている通りになる可能性があるわ。両腕がもげるかもしれないの？』

「此処まで状況が進めば、もはや引き返すことなど出来ない。それならば、いっそのこと私たちが知っている歴史通りに進めて、クラモン達をアーマゲモンに進化させる。そして、私がそれを倒す。口で言うのは簡単な話だが、実際にやってみるとこれが難しい話になるのだがな」

『わかったわ。でも、いざという時は私も援護に回るから』

「ところで、優衣さんはどのデジモンと一体化したのかな？」

「ひ・み・つよ」

「ふん。まあ、後で楽しみにしているよ」

オメガモンは優衣との通信を終えると、再び通路を進み始めた。

現実世界の東京湾付近の公園。

その場所で優衣は公園に並んでいた椅子に座りながら、自分専用のノートパソコンを弄っていた。

優衣は、ディアボロモンの操作主である正樹のことを調べていたのだ。

（それにしても、最悪な奴ね…… 悪いのは自分であって、オメガモンではないのに……）

優衣は、今までの記録を見ても、正樹に一切の同情も持たなかった。

正樹は、クラモンの操作主テイマーになってから周りに自慢したことで孤立し、その上、クラモンの存在を両親に知られて、勘当されてしまった。

その後、彼の唯一の特技であるニコポで、ジルとさくらを恋人にして、2人にパートナーデジモンを与えたのだ。

切原正樹は、デジモンオタクであることを差し引いたとしても、ジルとさくらの2人がいることから、恋愛も優柔不断で、このような事態を招いたことから、力を手に入れた途端調子に乗る上に、興味を感じない他人には横柄な態度をとる等の性格をしているため、元々友達と呼べるような人がいなかった。

しかも、唯一の友達だった人は、正樹がクラモンと共に暮らし始めてから、絶交されてしまったのだ。

ちなみに、正樹が何故オメガモンの適合者デユナミストにこだわっていたのかと
言うと、自分がこつも嫌われるようになったのは全てはディアボロ
モンのせいで、オメガモンの適合者デユナミストに自分がなれば、誰もが自分に
平伏するだろうという恐ろしいほど身勝手な考えから来るものだっ
た。

「さて、後はオメガモンが知っている歴史通りにアーマゲモンが現
れて、倒せさえすれば、私の依頼は完了ね…… オメガモン…… 貴
方が生きていて私は嬉しいわ、今度こそ一緒に戦えるもの」

優衣は呟くと、安堵の息を吐きながらパソコンの電源を切り、パ
ソコンの蓋を閉じると、東京湾に集まって来ている人々と東京湾の
海を覆うほどに集まったクラモン達の大群に顔を向ける。

それと同時に東京湾の海に存在していた無数のクラモン達は次々と
空へと舞い上がり、一ヶ所に集まっていくと、クラモン達は巨大な
デジタマへと変化し、不気味な沈黙を保ちながら静かに上空に浮か
び続けるのだった。

オメガモンとアーマゲモンとの戦いはあと少しまで迫っていた……

第4話 デイアポロモンの来襲 前編（後書き）

デジモン紹介

クラモン

世代／幼年期？ 属性／解析不可 種族／分類不可
必殺技／グレアアイ

コンピュータのバグによって突如出現した謎のデジモン。幼年期でありながら高いネット侵入能力を持っている。他のデジモンとは違い、進化ルートはひとつしかないが自分自身をコピーし、病原菌のように無数に増殖が出来ると言う恐ろしい力を持っている。コンピュータネットワークを悪用する人間の悪意や、ネットワーク上で繰り返られる争いによって発生する攻撃性が具現化し、人間の破壊本能が詰まったデジタマから誕生したとされている最悪の幼年期デジモン。そこから生まれたこの謎のデジモンは非常に危険な存在である。コンピュータネットワークの中で病原菌の様に繁殖して、軽度のネットワーク障害を引き起こす。必殺技は、巨大な目の部分からアワのようなモノを出す『グレアアイ』だ。

デイアポロモン

世代／究極体 属性／ウィルス種 種族／分類不可
必殺技／カラストロファイカノン、パラダイムロスト、闇の力、システムフェイル

クラモンの最終形態デジモン。ネットワーク上のあらゆるデータを吸収し、進化と巨大化を繰り返し、デジタルワールド電脳世界で破壊の限りを尽くしている。デイアポロモンの手足は柔らかく素早く伸び、手や足の爪は鋭く格闘戦を得意としている。またクラモンの時にあった自分自身で自分のコピーを作る能力も復活し、自身を無数に分裂させると言う恐ろしき能力を持っている究極体デジモン。多くのデータと知

識を吸収したディアボロモンは自らを全知全能の存在と思い込み、破壊と殺戮を楽しんでいる。しかし、数多く居るデジモンの中でも、その存在目的がはっきりしており、その最終目的は、軍事用コンピュータを乗っ取り、核攻撃によって現実世界をも破壊しようとしている、恐ろしいデジモンでもある。必殺技は、胸の発射口から破壊エネルギー砲を相手に向かって発射する『カタストロファイカノン』に、自身の全ての力を解放して相手と共に自爆する『パラダイムロスト』。周囲のデータを吸収し体を巨大化、無数の腕で相手を殴り続ける『闇の力』。そして自分の周りに居るデジモンのエネルギーを吸い取り、強制的に一段階退化させる『システムフェイル』だ。その他にも数多くの技を所持しているぞ。

第5話 ディアボロモンの来襲 後編(前書き)

結局、オメガモンとアーマゲモンとの決着を付けてお終いにしました。

ティマーとの決着はこれからの展開で書いていきたいです。

第5話 デイアボロモンの来襲 後編

東京湾。

その場所の上空には、無数のクラモン達が寄り集まって出来た巨大なデジタマが浮かんでいた。

そして、地上の公園や橋の上には沢山の人々がこれから始まるであろうオメガモンとアーマゲモンの激戦に思いを馳せながら、その時が来るのを待っていた。

その中には美藤達也や村田将吾、藤城拓海といった彰人の友人も存在していて、上空に浮かんでいる巨大なデジタマを見つめていた。

「彰人の奴、あの中から出てくる奴と戦うんだよな……」

達也は、周りにいる将吾たちに尋ねる。

「ああ。あいつだって、戦いたくない、逃げたい、と考えているだろうが、それでも必死で戦っているのがすごいよ。俺だったら、まず先に逃げるな」

拓海は苦笑しながら、達也の言葉に答えた。

「俺もだ。あいつ、きつと凄い苦しんで、凄い悩んで決意したんだと思う。あいつはあいつなりに頑張っているんだよな。病院に行ったとき、あいつ凄い苦しんでいた。俺たちには応援しか出来ないけど、それでもやるしかないよな」

将吾もそれに応じる。

ピエモンとの戦いの後で、入院した彰人はやつれていて弱っている

状態だったのだ。

彰人は、“自分はこの手で命を奪ってしまったのだから、もう後戻りは出来ない。僕は戦うよ。例えば、どんなに強い敵でも、辛い出来事でも。”と友人に話している。

「私も彼と同じ適合者デユナミストなんですよ、これでも」

『えっ！！』

彰人と同じく適合者デユナミストである工藤優衣はそう達也達に声を掛けると、彼らの横にソツと腰を下ろし、徐々に下降して来ているデジタマを見つめる。

その様子に達也たちも巨大なデジタマを見つめていると、デジタマをジツと見つめていた優衣がポツリと呟く。

「生まれるわ、アーマゲモンが」

『ッ！！』

優衣が声を呟き終わると同時に、空に浮かんでいた巨大なデジタマは中心から二つに割れ、その間から巨大なデジモンが海面に向かって落下し、危なげなく海面に六本の足を着地させた。

そのデジモンの姿を見ようと、東京湾に集まって来た誰もが巨大なデジモンに目を向けて、そのデジモンを目にする。

そのデジモンは、クモのような形をしながらも、大きさはディアボロモンやオメガモンを遥かに超える五十メートルほどの体長を持ち、長く巨大な尻尾の先端に赤い刃を生やし、同じように長い首を持つたデジモンだった。

聖書における最終戦争の名を持ち、最後の聖騎士を葬る最終戦争のために現れたようなデジモン―アーマゲモンが遂にその姿を現し、

正樹は、狂気に満ちた笑い声を上げながら自慢げにジルとさくらに話した。

「何か怖いけど、オメガモンも終わりね」

「オメガモン早く来ないかな」

正樹のニコポによって、洗脳されているジルとさくらは、口々に話した。

自身の姿に圧倒されている人間達には構わずにアーマゲモンは辺りを見回し、オメガモンが現れないかどうかを警戒し始める。

オメガモンが現れるのは正樹とアーマゲモンからすれば嬉しい事だが、2度もオメガモンと戦っているアーマゲモンはオメガモンとの戦いを楽観している正樹とは違い、今回のオメガモンは強敵であると判断している。

アーマゲモンはクラモンの時に自身の生みの親であるディアボロンとオメガモンの戦いを見ていた。

自分が見たオメガモンは自分が以前戦ったオメガモンと圧倒的に何が違うことにアーマゲモンは既に気づいていた。

その結果、オメガモンには“人間の心と魂”が存在していることが分かった。

“人間の心と魂”をデジモンが持つことが一体どのような力を得るのかまでは流石にアーマゲモンにも分からなかったが、“人間の心と魂”を持っているオメガモンによって、自身が敗北してしまう可能性も存在している。

なので、オメガモンをかつて倒したとき以上に気を引き締めて行かなければならない。

アーマゲモンは、戦いには何が起るのか誰にもわからない恐怖があることを、正樹と違って十分に理解している。何しろ、ディアボロモンはそれによって2度も選ばれし子供たちに敗北したのだ。

幾ら今自分が戦う相手が、かつて倒したオメガモンだとしても、今回は負ける可能性も存在している。

その事を考えたアーマゲモンはどのようにオメガモンに攻撃すればいいのかを、オメガモンに顔を向けながら考える。

(凄い物を感じる…… 正直、私でも勝てるかどうか分からない……
……これが私と同じ超越体なのか…… だが、不思議と心の底から楽しいと感じる……)

オメガモンは既にアーマゲモンに自身の力が及ばない事を、『ディアボロモンの逆襲』を見た時から分かっていたが、アーマゲモンを見た瞬間に既に確信していた。

何故なら、相手は自分と同じ超越体だが、オメガモンやインペリアルドラモンでさえも勝てずに、インペリアルドラモン パラディンモードによつてクラモンに初期化したことでようやく倒されたことから、正攻法が通じにくい強敵であるアーマゲモンであるからだ。そのアーマゲモン相手にオメガモンとしては悔しいが、勝てる確率は限りなく低く、もしかして皆無に近いのかもしれない。

しかも、オメガモンはピエモンが初陣の相手だったが、実質これが第二戦なのだ。

ネット世界でのディアボロモンとの戦いを含めれば、第三戦だ。まだ、片手の指で数えることが出来るくらいしか、オメガモンは戦っているのだ。

幾らなんでも、これは辛いだろう。

だが、たかだがその程度の事でオメガモンはアーマゲモンとの戦いから退くつもりは全く無い。

「ムッ!!」

何回避けても自分に向かって来るブラッククレインにオメガモンは僅かに声を上げながらも、自身を追尾して来るブラッククレインを避ける為に、海面の方に向かって飛ぶと、ブラッククレインに追尾されながらも、ブラッククレインを撃ち出した本人であるアーマゲモンに向かって突進する。

「ギギヤア!!」

アーマゲモンは自分の前で浮かび上がり、追尾して来ているブラッククレインを自身にぶつけようとしているオメガモンの考えを見抜くと、即座に再び口にエネルギーを集め、アルティメットフレアを突進して来ているオメガモンに向かって撃ち出す。

アルティメットフレアを自分に向かって突進して来ているオメガモンに直撃させることによって、オメガモンを追尾して来ているブラッククレインも一緒に当ててしまおうという魂胆だ。

「アルティメットフレア!!」

「かかったな!! それを待っていたぞ!!」

「グッ!!」

アーマゲモンがアルティメットフレアを撃ち出すと同時に、オメガモンは距離がまだアーマゲモンと離れていながらも急上昇を行い、それと同時にオメガモンを追尾していたブラッククレインも上昇するが、その途中で正面から真っ直ぐ向かって来ていたアルティメットフレアとブラッククレインは衝突し合い、大爆発が起こった。

その様子にアーマゲモンは自身が逆にオメガモンの策に乗ってしまった事に気がつく、顔を悔しげに歪める。

オメガモンは最初から自身を追尾して来ているブラッククレインと自分を策にはめるために撃ち出すであろうアルティメットフレアを激突させ合うつもりだったのだ。

ブラッククレインとアルティメットフレアの激突によって必ず発生するであろう周りが見えないほどの煙こそ、オメガモンが本当に望んでいた隠れ蓑だったのだ。

強大な相手に勝利するためにはただ闇雲に攻撃すればいいという訳ではないということ。ピエモンとの戦いで学んだオメガモンは、アーマゲモンの強大な攻撃を敢えて逆手に取ることで、周りが見えなくなるほどの煙を発生させたのだ。

そして、オメガモンとは違い、気配が読み取ることの出来ないアーマゲモンは慌ててオメガモンを発見しようと辺りを見回すが、その前に顎に苦痛を感じた。

「グレイソーード!!!」

「ガハッ!!!」

突然、無防備だった顎の下からのオメガモンのグレイソーードの斬撃に、アーマゲモンは自分が受けたダメージよりも驚愕によって呻き声を上げてしまう。

しかし、オメガモンは巡って来た千載一遇の好機を逃さないと言うように、突然の奇襲に動きが止まってしまっているアーマゲモンの顔に向かって右回し蹴りを繰り返す。

「ダアアアアアア!!!」

「ガアッ!!」

オメガモンの右回し蹴りをモロに食らったアーマゲモンは、再び苦痛の声を上げてしまう。

オメガモンは、次々とダメージから回復していないアーマゲモンの頭部に凄まじい冷気を纏わせた右手や激しい炎を纏わせたグレイソード、または渾身の力を込めた蹴りなどを連続で繰り出し続けている。

オメガモンはあらかじめ『ディアボロモンの逆襲』を見たことでアーマゲモンの決定的な弱点に気がついていていた。

確かに、強力なガルルキャノンの砲撃やギガデスを撃ち込んでもアーマゲモンは微動だにしなかった。

だが、オメガモンが見ていた点はそこではない。

『ディアボロモンの逆襲』の時のオメガモンとアーマゲモンとの戦いを何回も見ること、アーマゲモンにも弱点が存在していることを確信したので。

アーマゲモンは、オメガモンのガルルキャノンの集束砲撃を喰らってもあまりダメージが無いほどの防御力を誇っているのだが、それならば何故突進してくるオメガモンに執拗に攻撃をしていたのか何故なら、アーマゲモンは自身に敵が接近しないように攻撃をしていただけなのだ。

それに、アーマゲモンの体の大きさはオメガモンを遙かに越えている大きさだ。

アーマゲモンの大きさが50mなのに対して、オメガモンのそれは半分以下の20mほどである。

なので、この戦いはまるで、ウルトラマンとガンダムが戦っている

オメガモンの中にある物は、諦めや絶望感、そして悲壮感などではなく、負けられない意地と、強大な相手に立ち向かう勇気と決して諦めずに、前に進もうとする強い心と意志だ。

逆にアーマゲモンの強さに押されるように、オメガモンは戦いの中で進化しているのだ。

それはオメガモンに”人間の心と魂”があるからこそ出来ることなのだ。

「オメガモンの奴、なかなかやるな……」

正樹は、予想以上のオメガモンの善戦を見て、自分の思い通りに行かないことに対して苛立っていた。

「……………」

ジルとさくらは、勝ち目が無いのにアーマゲモンに抗い続けるオメガモンの姿を見て、何かを思ったのか、顔を見合わせて頷くと正樹に気づかれぬように何処かに向かった。

一方、アーマゲモンの中では自身の目的を阻み続け、更に僅かながらもダメージを与え続けるオメガモンに対して憎しみと怒りが倍増して来ていた。

口からアルティメットフレアを放ってオメガモンを攻撃しようとしても、エネルギーがチャージされる瞬間がオメガモンには分かってしまうので、口にエネルギーを集めると同時に集中的に口の部分を攻撃されてしまうので、エネルギーと攻撃による苦痛のダブルパン

「オメガモン!!!」

苦痛の叫びを上げたオメガモンの姿に、離れた所の丘の上や公園で戦いを見ていた人々はオメガモンの名を叫んだ。

しかし、オメガモンは人々の声に答える事も出来ないのかガツクリと顔を下に向けてしまい、アーマゲモンはその隙を逃さずに再びアルティメットフレアを撃ち出した。

「アルティメットフレアッ!!!」

「ガルルキャノン!!!」

だが、オメガモンは自分に向かって来るアルティメットフレアを見ると、直ぐ様ガルルキャノンから砲撃をアルティメットフレアに向かって撃ち出した。

二体が放った必殺技は二体の中心でぶつかり合い大爆発を起こした。

「クッ!!!」

しかし、爆発の衝撃は全てオメガモンの方へと流れて来て、オメガモンは避けることが出来ずに、後方へと後退してしまった。

それを見たアーマゲモンは、次々とオメガモンに向かって口からアルティメットフレアを連射する。

(くそ……… せっかくいい所まで行ったのに……… でも、諦めないぞ!!!)

オメガモンは海面を素早く駆けながら次々とアーマゲモンが放つアルティメットフレアを避けると、海面を勢いよく蹴りつけて、それによって巻き上がった海水の幕で自身の体を覆い隠す。

「ギギヤア!?!」

アーマゲモンはその様子に砲撃を止めて、オメガモンの姿を発見にしようとすると同時に、海水の幕からオメガモンが飛び出し、そのままアーマゲモンを飛び越え、体を反転させると同時に右手のガールルキャノンから砲撃を連射する。

「ガールルキャノン!!」

「ガギヤアアアツ!!」

オメガモンの連射砲撃が全弾直撃したアーマゲモンは苦痛の叫びを上げながら、爆発で発生した煙の中に姿を消して行く。

その様子を見てもオメガモンは油断無く構えをアーマゲモンに向かって取るが、今度は逆にアーマゲモンが煙を隠れ蓑にしてオメガモンに向かってアルティメットフレアを撃ち込む。

「ガアアツ!! アルティメットフレアツ!!」

「グアアツ!!!」

煙の中から放たれたので、完全に方向が読めなかったアルティメットフレアをオメガモンは避ける事が出来ずに直撃を喰らい、後方へと吹き飛ばされてしまい、倒れてしまった。

その戦いを見ていた誰もが気がついていた。

オメガモンの放つ攻撃はアーマゲモンに少しづつでしかダメージを

正樹は、瞳から光を失い、仁王立ちし続けているオメガモンを目撃しながら大笑いを続ける。

「あれ！？ ジルとさくらがない？ トイレに行くならきちんと言えばいいのに……」

ジルとさくらに自分が見捨てられたことを知らない正樹は、疑問に思いながらもアーマゲモンを誇らしげに見つめている。

「ウツ、ウウツ……」

『！！』

しかし、戦いの場から離れていた所で瞳から光を失い、仁王立ちをしているオメガモンから呻き声が聞こえたので、人々は驚愕した。

「行かなくては…… このままでは終われない…… 私が行かなくては…… 私はアーマゲモンに勝ちたい……」

瞳から光を失いながらも、全身に力を込めて、両腕を元に戻そうと頑張るオメガモンの姿を見た達也達は自分たちの思いを叫ぶ。

「そつだ！！ 立ち上がれ！！ 彰人！！ お前はどんな辛いことでも立ち上がり、立ち向かっていった！！ そんなお前を見て、俺も頑張れた！！」

「負けるな！！ 彰人！！ 俺はお前のおかげで最後まで志望校合格の夢を諦めなかった！！ だから、今こうして楽しい大学生活を

送っているんだ!!」

達也と将吾の声が、彰人の心に響いたのか、オメガモンの胸にある赤い宝玉のような物が輝いた。

(オメガモンの適合者^{デユナミスト}…… 貴方は自分の信念を曲げずに私たちに勝利した…… 貴方は本当に強い!!)

正樹のニコポによる洗脳が解けたのか、ジルとさくからも気がつく
と人々の中にいて、オメガモンに自分たちの思いを届ける。

その思いが届いたことを表すかのように、再び、オメガモンの胸が輝いた。

達也達の行動ともう一度立ち上がるうとしているオメガモンの姿を見て、誰もが再び希望を胸に抱いた瞬間、両手を失い立ち尽くしていたオメガモンの目に再び光が宿ると、地面に落ちていたウォーグレイモンの頭部を模した左腕と、メタルガルルモンの頭部を模した右腕の目の部分に光が発生して、オメガモンの肩まで宙に浮かび上がる。

『そつだ……君たちは最後まで諦めなかった……』

『最後まで諦めない君たちのために今こそ応えよう!!』

ウォーグレイモンの頭部とメタルガルルモンの頭部が言葉を呟き
終えた瞬間、オメガモンのボディは光り輝き、右腕と左腕がくっつ
いた。

すると、オメガモンの体から虹色のデジコードが出現すると、デジ
コードはオメガモンを覆うように包み込んで行くと、デジコードの
繭を形成した。

スにより、ダメージが癒えて進化を終えたオメガモンだった。

『オオツ!!!!!!』

復活したオメガモンの姿に、人々は思わず声を上げた。

「……………アーマゲモン。お前はこの私が倒す!!!」

オメガモンはアーマゲモンに向かってそう言うと、自分を復活させてくれた人々を見て力強く頷くと、そのまま東京湾の方に向かって飛び立った。

「ガールルキャノン!!!」

オメガモンは、ガールルキャノンからアーマゲモンに向かって、先程よりも威力が大幅に向上した砲撃を連射する。

『グガアツ!!!』

オメガモンが放った連続砲撃を全弾直撃されて、苦痛の声を上げながらアーマゲモンは後退り、少しでもオメガモンの攻撃から逃れようとする。

「先程の失敗した攻撃をここでさせてもらっぞ!!! ガールルキャノン!!!」

オメガモンは、アーマゲモンの足に向かってガールルキャノンから次々と冷氣弾を連射した。

冷氣弾は全弾アーマゲモンの足に命中すると、即座に凍り、アーマゲモンの動きを封じた。

「ギギヤア!?!」

アーマゲモンは、自身の足が凍って使い物にならなくなったことに驚愕する。

これで、オメガモンによってアーマゲモンの動きは封じられて、アーマゲモンは一切動くことができなくなったのだ。

オメガモンはその隙を逃さずにグレイソードを装備している左腕を身体ごと大きく振りかぶり、グレイソードを思いきり薙ぎ払うと、グレイソードから巨大な光刃をアーマゲモンに向かって放った。

「オメガ・セヴァー・シュトローム!!!」

「グガッ!!!ググググッ!!!ブラッククレイン!!!」

オメガモンが発射したオメガ・セヴァー・シュトロームが背中直撃したアーマゲモンは、今のはかなりダメージを受けたのか悔しげで苦痛を感じさせる唸り声を上げ終わると同時に、自身の背中からオメガモンに向かってブラッククレインを発射した。

「ムッ!!!」

それに対してオメガモンは即座に体を動かし、ブラッククレインから逃れようとするが、さすがに追尾能力を持っているブラッククレインから逃れる事は出来なかったが、全弾直撃を喰らう寸前に自分を中心に球体上のバリアーテンセグレートシールドを張ることでブラッククレインを防いだ。

「アルフォースブイドラモン!!! すまない!!! 君の技を借りる

！！ テンセグレートシールド！！」

「ウオオオオオオーーーー！！！！！！」

テンセグレートシールドを解除したオメガモンが再度突進して、そのままアーマゲモンの頭上に移動すると、両手を体の前で交差させることで光の力を右手のガルルキャノンに集中させると、ガルルキャノンの照準をアーマゲモンに向けて、凄まじい光エネルギーを集束させた砲撃をアーマゲモンに向かって撃ち込んだ。

「オメガ・シャイニングレイ・シュトローム！！」

「ガアアアアアアアアアアッ！！」

オメガモンが放ったオメガ・シャイニングレイ・シュトロームを真正面から喰らったアーマゲモンは、苦痛の叫び声を上げながら、一瞬粒子レベルで分解されかけたが、何とか耐えきった。

「嘘！？ ピエモンを倒した技を耐えきるなんて……」

オメガ・シャイニングレイ・シュトロームによって自身のパートナーデジモンであったピエモンを粒子レベルにまで分解されて消滅されたことを覚えているジルは、オメガ・シャイニングレイ・シュトロームを耐えきったアーマゲモンの姿を見て驚愕した。

「アルティメットフレア！！」

オメガ・シャイニングレイ・シュトロームによって、全体的に攻撃力と防御力が低下したことなど一切構わずに、自身の上空に存在しているオメガモンに向かってアルティメットフレアを連射する。

上げた。

「フウ……」

オメガモンは、顔の前で両手を交差させると、虹色のデジコードを体から発生させると、人間である永島彰人の姿へと戻った。

彰人は昇ってきた朝日の眩しさに、目を細めてしまった。

「皆さん…… 本当に有難うございました!!! 私が勝てたのは決して私個人の力ではなく、皆さんの力があつたからです!!! 本当に有難うございました!!!!」

そして、彰人は、人々の顔を一人一人確認するかのように見ながら話すと、再度深々と頭を下げた。

誰かが彰人に拍手を始めると、それに釣られて全員が彰人に拍手をした。

それを見た彰人は感謝の涙を流しながら、何回も頭を下げた。

（覚えていろ…… オメガモン!!! 俺は絶対にお前を倒す!!! 俺に恥をかかせて、大切なものまで奪い去ったオメガモン…… 俺はお前を滅ぼすまで諦めないぞ!!!）

人々とは違い、アーマゲモンが倒されたことを確認したディアブロモンの操作主である正樹は真っ直ぐに家に帰った。

この時には、ジルとさくらが自分を裏切ったことを正樹は知っていたのだ。

正樹は、デジヴァイスを見ながら、オメガモンへの復讐に心を燃や

していた。

第5話 ディアボロモンの来襲 後編（後書き）

デジモン紹介

アーマゲモン

世代／究極体 属性／解析不可 種族／分類不可
必殺技／アルティメットフレア、ブラッククレイン
とてつもない数のクラモンが集まり、融合した結果生まれた突然変異の特殊デジモン。種族も属性も謎で、凶悪な性格をしていると言われている。生みの親であるディアボロンを超える力を持ち、オメガモンを倒す事だけを目的として生まれた。必殺技は、巨大な口から破壊のエネルギー弾を相手に向かって放つ『アルティメットフレア』に、背中から追尾能力を持ったエネルギー弾を一度に何十発も相手に向かって発射する『ブラッククレイン』だ。

倒し方で色々悩みましたが、最終的にこれに落ち着きました。
X進化させてしまうと、物語が恐ろしくつまらなくなってしまうので……

次回予告

アーマゲモンとの戦いからしばらく経ったある日、ある人物が彰人の家に来た。

そこで知らされる真実に彰人は決意を固める。

そして、意外なデジモンと同盟を結ぶことに!?

次回、世界を越える終焉の聖騎士物語

最強の同盟！？ ロイヤルナイツと七大魔王！！

聖騎士は決意する、自身が守るべく世界を渡ることを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724w/>

世界を越える終焉の聖騎士物語

2011年10月9日01時41分発行